

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会(第 39 回)

日時：令和 7 年 1 月 28 日（火）15:00～16:30

場所：西の丸会議室

次 第

1 開会

2 あいさつ

3 議事

・二之丸庭園の修復整備について

＜資料 1＞

4 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会(第 39 回)出席者名簿

日時：令和 7 年 1 月 28 日（火）15:00～16:30

場所：西の丸会議室

(敬称略)

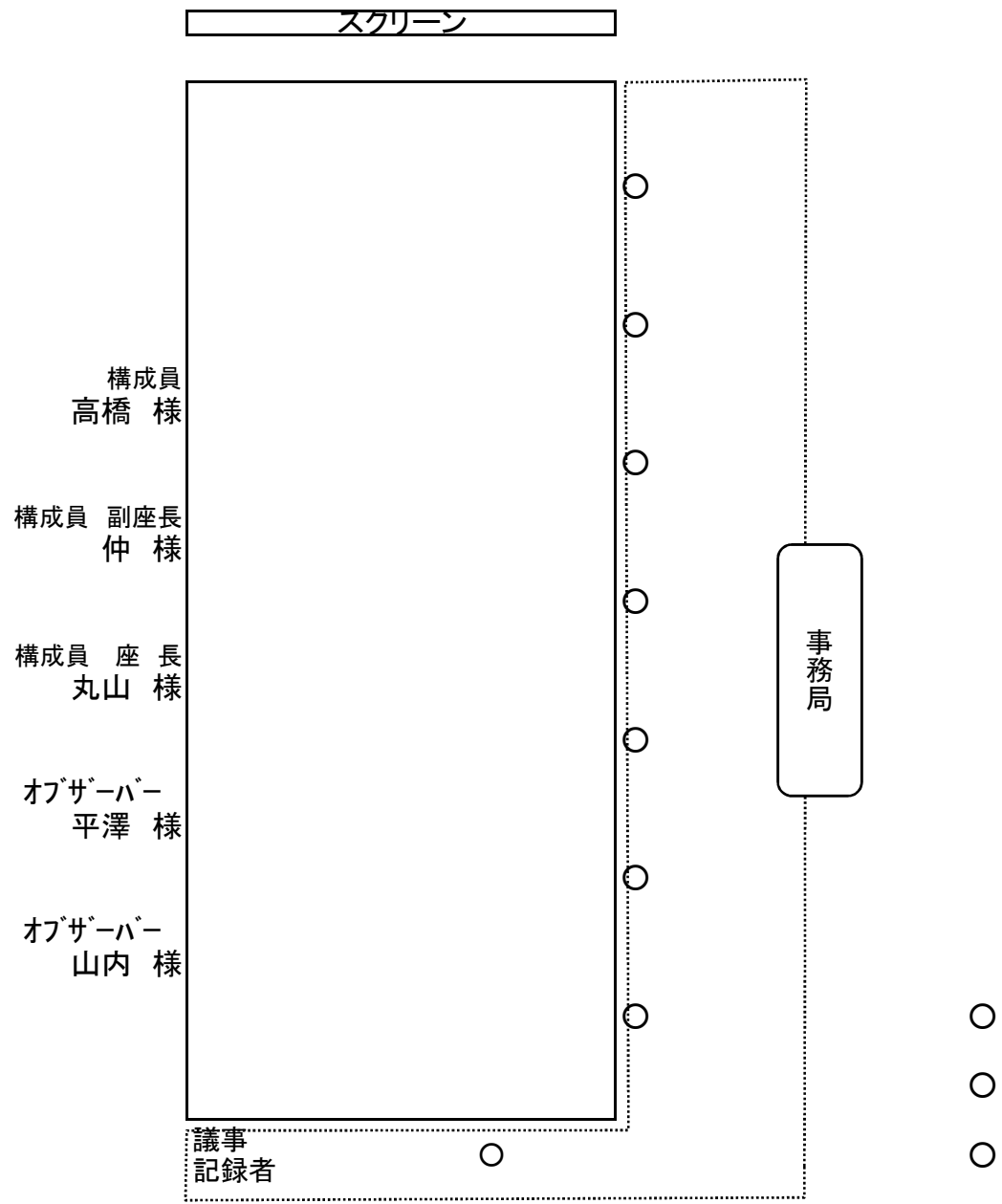
■構成員

氏 名	所 属	備 考
丸山 宏	名城大学名誉教授	座長
仲 隆裕	京都芸術大学教授	副座長
高橋 知奈津	奈良文化財研究所文化遺産部 遺跡研究室 室長	

■オブザーバー

氏 名	所 属	備 考
平澤 毅	文化庁文化財第二課主任文化財調査官	
山内 良祐	愛知県民文化局文化部 文化芸術課文化財室 技師	

庭園部会 第39回 座席表



二之丸庭園の修復整備について

1 余芳周辺の整備

余芳周辺整備にあたり、石橋、燈籠、木橋、立ち手水鉢、標柱、枝折戸、袖垣、植栽、余芳の雨落ち、景石の配置について検討した。修復整備は、整備計画書の基本方針にあるとおり、北御庭については『御城御庭絵図』に描かれた空間性を回復することを基本とするが、整備計画書の「第2章計画地の概要 第2節沿革と史料 第2項参考史料の概要」にあるとおり、同時代に描かれた『尾二ノ丸御庭之図』は、『御城御庭絵図』と異なる箇所が見られるため、2つの絵図を比較検証することで考察を深める。『尾二ノ丸御庭之図』と『桜御間南御庭四季之図』には、植栽名が記載されており、樹木選定に際し史料として取り扱う。また、余芳と思われる第14代藩主慶勝によって撮影された古写真についても史料として取り扱う。

(1) 古絵図

ア 御城御庭絵図／作成年代：文政年間（名古屋市蓬左文庫所蔵）（図1-1）

第10代藩主斉朝により改修された二之丸庭園を詳細に描いた絵図で、文政年間に作成されたと考えられる。

イ 尾二ノ丸御庭之図／作成年代：文政以降（徳川美術館所蔵）（図1-2）

文政期の庭園を描いた詳細な絵図であり、二度の大きな修正が認められる。

ウ 桜御間南御庭四季之図／作成年代：文政以降（名古屋市蓬左文庫所蔵）（図1-3）

二之丸御殿の桜之御間南御庭を描いた絵図であり、植栽については樹種や尺寸が記されている。

(2) 古写真

ア 第14代藩主慶勝によって撮影された写真。余芳に関する写真は1枚確認されている。



図 1-1 『御城御庭絵図』
(名古屋市蓬左文庫所蔵)



図 1-3 『桜御間南御庭四季之図』
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

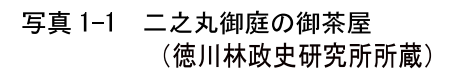
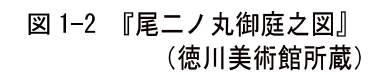


写真 1-1 二之丸御庭の御茶屋
(徳川林政史研究所所蔵)



2 構造物

(1) 石橋の構造検討

ア 前回部会等までの検討済事項

- ・石橋は、現地で実寸模型にて大きさと配置を検討し、『御城御庭絵図』と同様に2本を南北にずらして設置することを確認した。
- ・対象箇所西側の権現山階段下の石橋天端高は、北側タタキ護岸及び沢飛石と南側タタキ護岸の天端高に高低差があることから、対象箇所の石橋についても、橋両端の高低差をそのまま活かした高さ設定とする。
- ・橋長は、沢飛石1に接し、南側タタキ護岸にかかるようL=2.4m以上とする。
- ・幅は、沢飛石2に架かるよう、50cm程度とする。
- ・厚みは、沢飛石1との高低差を考慮し、つまづきにくい段差とし、かつ十分な耐荷重を見込み、厚さ18cm以上確保する。
- ・石材は、新材とする。
- ・配置について、北側は2本とも沢飛石ー2に、南側はタタキ護岸に架ける。

イ 今回検討事項

- ・石材は、庵治石中目、白石島白石または岡崎産の新材（W240×L2600×t180×2本）とする。天端はノミ切り仕上げで2分程度ムクリ仕上げとし、側面は天端より150mmはノミ切り仕上げ、底面は荒はつり仕上げとする。沢飛石2南側タタキ護岸に架かる箇所は、欠き込み仕上とする。



図 2-1 石橋『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

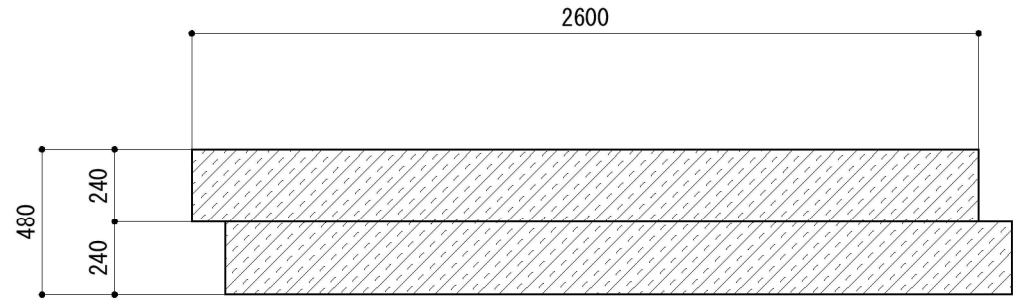
図 2-2 石橋『尾二ノ丸御庭之図』部分
(徳川美術館所蔵)



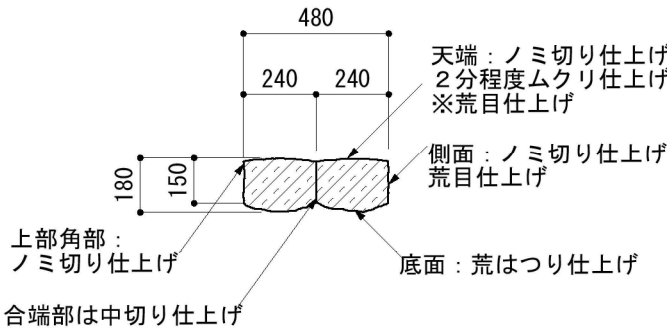
写真2-1 発掘調査後写真（上空より）
(赤点線：計画線加筆)



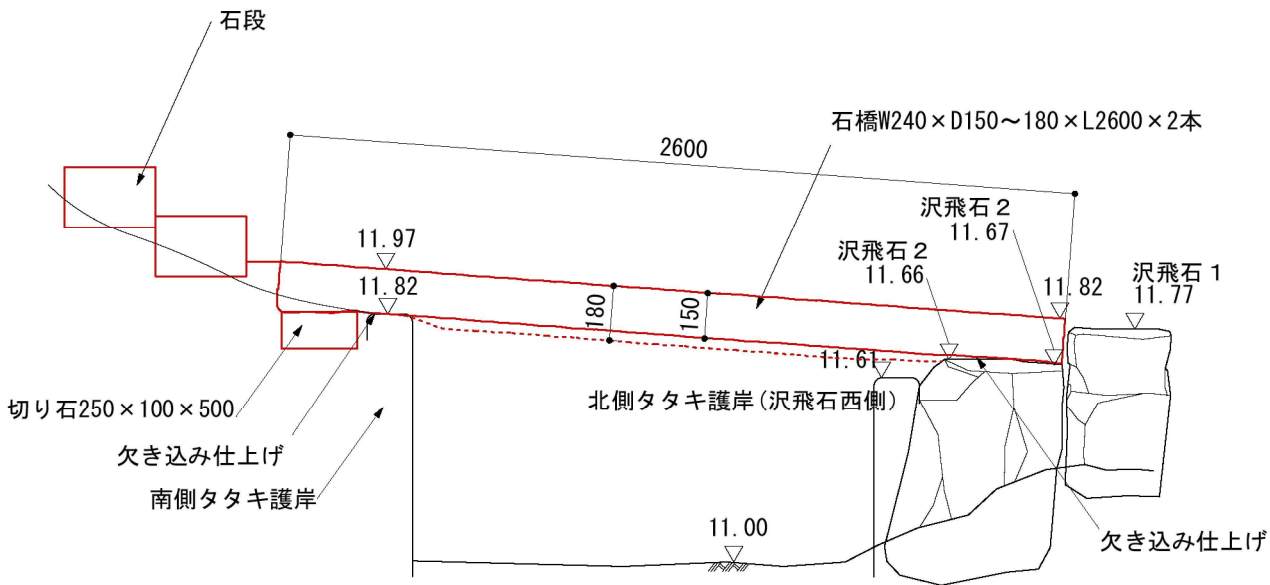
写真2-2 実寸模型設置状況（上空より）



石橋平面図 S=1:25



石橋断面図 S=1:25



石橋設置断面図 S=1:25

図2-3 石橋構造検討図

(2) 石造物の構造検討

ア 雪見燈籠-1

(ア) 前回部会等までの検討済事項

- ・雪見燈籠-1 は、兼六園の雪見燈籠 (W1870 × H1870) (写真 2-3, 図 2-6) を参考にした製作品とする。
- ・令和 5 年度に施工済みの石組 (No. 16:W205cm × D125cm × H70cm) に設置する。
- ・現地で実寸パネル模型にて大きさを比較検討した結果、兼六園よりひと回り小さい W1500 × H1500 とする。(写真 2-4)
- ・石材は、市場性、加工のしやすさを考慮に入れ、庵治石中目、白石島白石、岡崎産石材の中から選定する。

(イ) 今回検討事項

- ・表面はノミ切ビシャン仕上げとする。

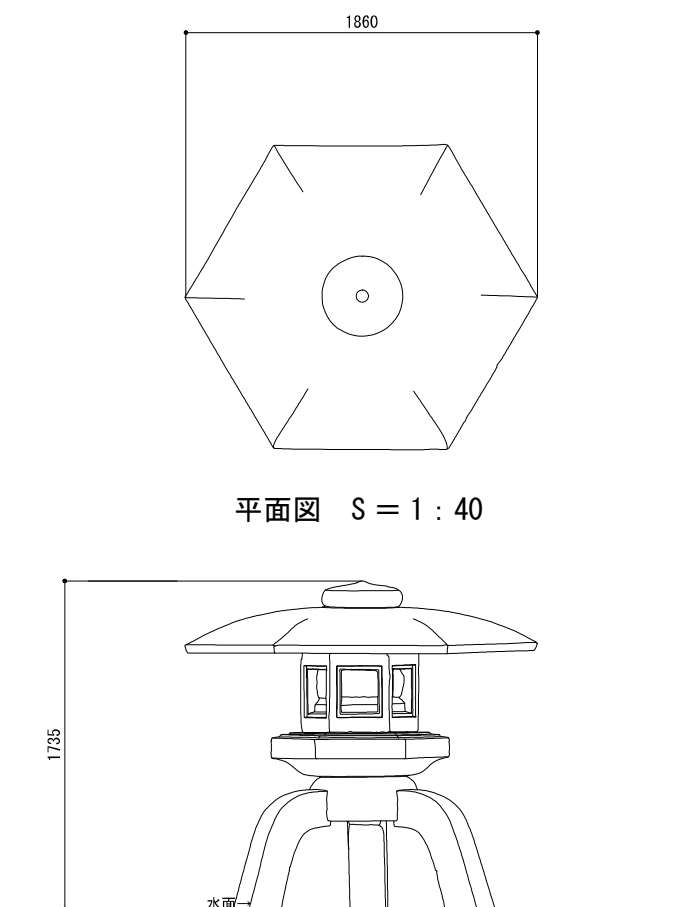


図 2-4 雪見燈籠-1 『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

図 2-5 雪見燈籠-1 『尾二ノ丸御庭之図』部分
(徳川美術館所蔵)



写真 2-3 兼六園雪見燈籠



平面図 S = 1 : 40

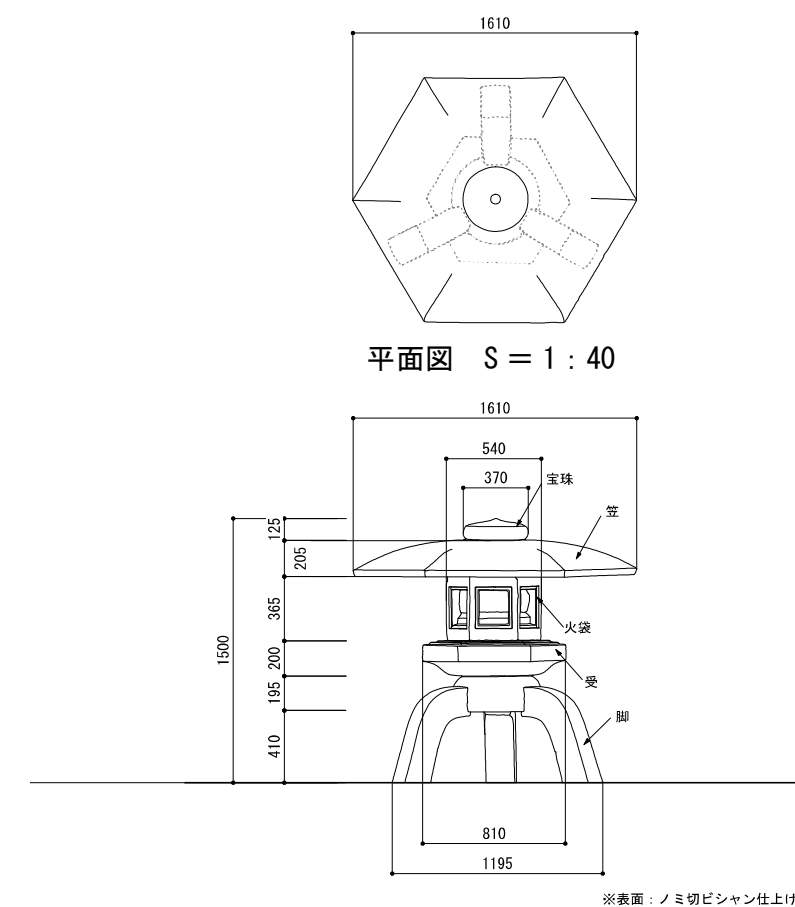
断面図 S = 1 : 40

(兼六園実測図)

図 2-6 兼六園雪見燈籠 実測図



写真 2-4 雪見燈籠-1 実寸パネル (W1500 × H1500) 配置状況



平面図 S = 1 : 40

断面図 S = 1 : 40

(兼六園実測図 H1500 サイズに縮小 86.5%)

図 2-7 雪見燈籠-1 構造検討図

イ 雪見燈籠－2
（ア） 絵図の比較検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較し、雪見燈籠－2の検証結果を下表にまとめると、概ね同様の形で設置箇所も同様な描き方をされている。

表 2-1 雪見燈籠 -2 における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	部位	御城御庭絵図	尾二ノ丸御庭之図
雪見燈籠－2	宝珠	球状の表現	同左
	笠	平面形状、断面形状とも曲線で描かれている	平面形状は直線、断面形状は曲線で描かれている
	火袋	丸みを帯び、正面から1面見える表現	同左
	中台	円柱の表現	同左
	脚	正面から3本見え、脚先は笠の軒と同じ表現	同左
	設置箇所	石組上に設置している表現	同左



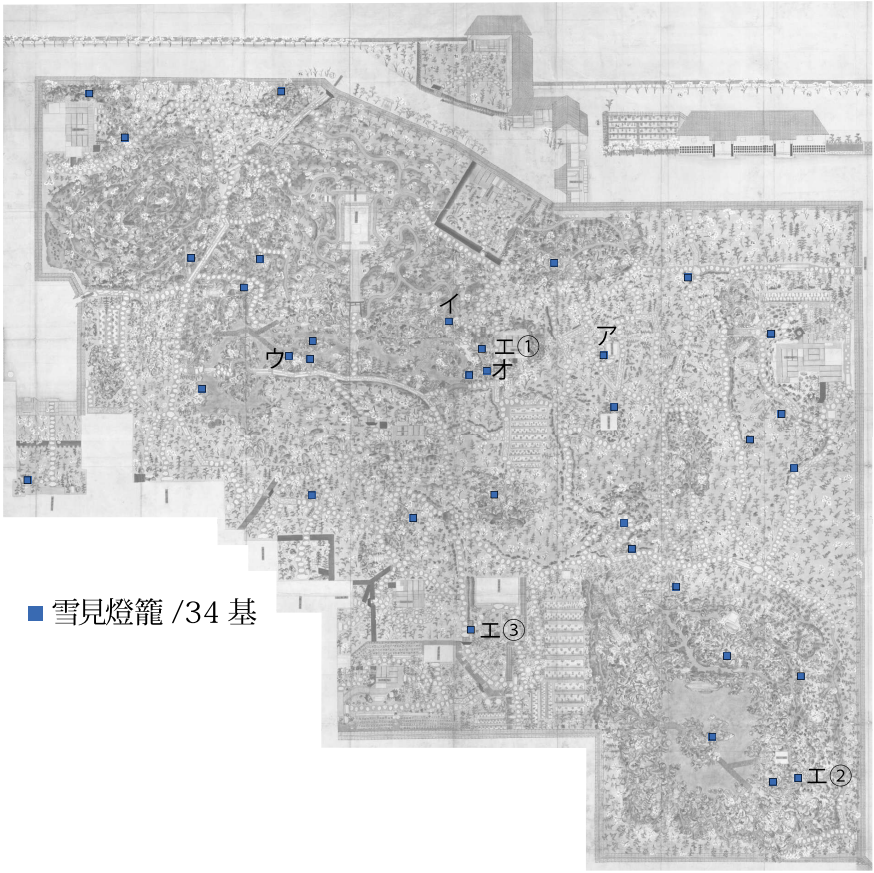
図 2-8 雪見燈籠 -2『御城御庭絵図』部分
（名古屋市蓬左文庫所蔵）

図 2-9 雪見燈籠 -2『尾二ノ丸御庭之図』
部分（徳川美術館所蔵）

『御城御庭絵図』には、雪見燈籠が 34 基描かれている（図 2-10）。
火袋と脚の形、脚の本数により雪見燈籠の描かれ方を分類すると、脚が 4 本描かれているものが 2 基、3 本が 29 基、2 本が 1 基、植栽や岩に重なり判明しないものが 2 基であった。それぞれの代表的なものを図 2-11 から図 2-17 に示す。雪見燈籠 -2（図 2-14）と同様に火袋が四角型で脚が 3 本の一体型で描かれているものは 3 基認められる（図 2-10 のオ①～③、図 2-14 ～ 16）。脚が 3 本描かれているものの中で組込型（図 2-12）は中央の脚が中心に描かれている。一方、一体型はやや右寄りに描かれており（図 2-13 ～ 16）、4 本一体型（図 2-11）の前面 3 本の描かれ方と類似する。

表 2-2 『御城御庭絵図』における雪見燈籠の分類

火袋と脚の形		絵図上の脚の本数				合計
火袋の形	脚の形	4本	3本	2本	不明 （植栽、岩に重なる表現）	
六角	組込型	1基（ア）	11基（ウ）			12基
	一体型		15基（エ）	1基（カ）	1基	17基
	不明				1基	1基
四角	組込型					0基
	一体型	1基（イ）	3基（オ）			4基
合計		2基	29基	1基	2基	34基



■ 雪見燈籠 /34 基

図 2-10 雪見燈籠位置図『御城御庭絵図』
（名古屋市蓬左文庫所蔵）

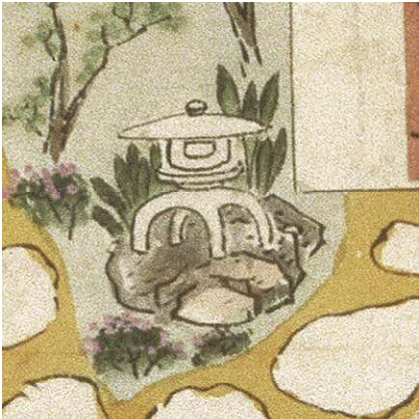


図 2-11 雪見燈籠（東園）
脚：4 本一体 火袋：四角（丸）
（図 2-10 のア）



図 2-12 雪見燈籠（北園池）
脚：3 本組込 火袋：六角
（図 2-10 のイ）



図 2-13 雪見燈籠（北園池）
脚：3 本一体 火袋：六角
（図 2-10 のウ）



図 2-14 雪見燈籠（余芳）
脚：3 本一体 火袋：四角（丸）
（右 90 度回転・図 2-10 のエ①）



図 2-15 雪見燈籠（南御庭）
脚：3 本一体 火袋：四角
（左 90 度回転・図 2-10 のエ②）



図 2-16 雪見燈籠（植木屋）
脚：3 本一体 火袋：四角
（180 度回転・図 2-10 のエ③）



図 2-17 雪見燈籠（余芳）
脚：2 本一体 火袋：六角
（図 2-10 のオ）

図 2-11 ～ 17 雪見燈籠『御城御庭絵図』（絵図上の脚の本数）

(イ) 前回部会等までの検討済事項

- ・雪見燈籠-2は、古材を検討し、適切なものがなければ部分的に製作品と組み合わせる。
- ・絵図より、雪見燈籠-2の大きさは、雪見燈籠-1よりも小さいこと、市場性とを考慮し高さ H=900mm、幅 W=900mm とする。

(ウ) 今回検討事項

- ・脚の本数及び形状は絵図の比較検証結果より、4本一体型とする。
- ・石材について、笠、火袋、受は古材（庵治石／大正時代）（写真 2-5）を使用する。
- ・脚については、市場性を考慮し古材（参考事例：写真 2-6）を使用する。
- ・宝珠は笠と同等の庵治石で製作する。表面はノミ切ビシャン仕上げとする。



↑ 古材使用（笠、火袋、中台）
↓ 古材不使用



↑ 古材不使用
↓ 古材使用（脚）

写真 2-5 雪見燈籠-2 古材（笠、火袋、中台）
（庵治石／大正時代）

写真 2-6 雪見燈籠-2 古材（脚：4本）
（庵治石／明治時代）

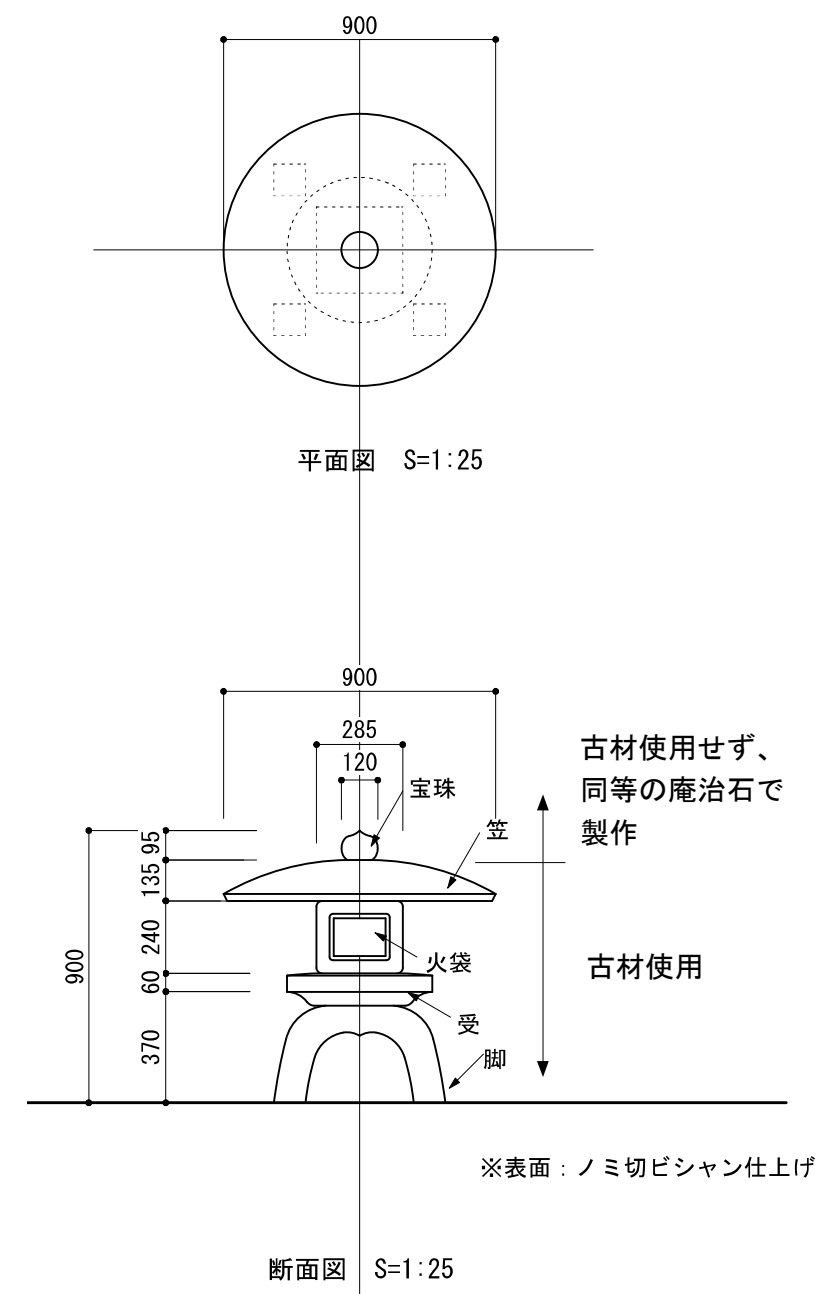


図 2-18 雪見燈籠-2 構造検討図（脚 4本）

エ 四角型燈籠

(ア) 前回部会等までの検討済事項

- ・四角型燈籠は、古材を使用する。
- ・復元中の余芳周囲の GL は 13.80 である。復元された手水鉢は高さ 928mm であり、台石の高さを 130mm とすると、手水鉢の天端は GL から 1058mm の高さとなる。
- ・古写真において、立ち手水鉢の天端高と四角型燈籠の笠の軒高は同様であることから、四角型燈籠の笠軒高は GL から約 1 m と推定し、構造検討する。
- ・四角型燈籠は宝珠、笠、火袋受は古材（白川石/江戸時代）（写真2-7）を使用し、市場性、加工のしやすさを考慮に入れ、竿は古材部と同等の白川石で製作する

(イ) 今回検討事項

- ・竿はφ210mm、地上部H600mm程度とし、施工時に根入れ深さを調整する。
- ・現地にて実寸大模型をGLよりH=1200mm、1320mmの2案設置し（写真2-9～10）検討する。

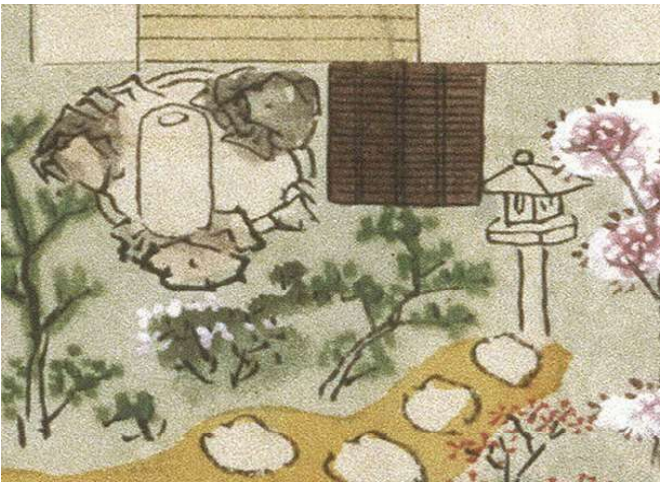


図 2-22 四角型燈籠『御城御庭絵図』部分
（名古屋市蓬左文庫所蔵）

図 2-23 四角型燈籠『尾二ノ丸御庭之図』
部分（徳川美術館所蔵）



写真2-9 実寸模型設置状況
(H=1200mm)



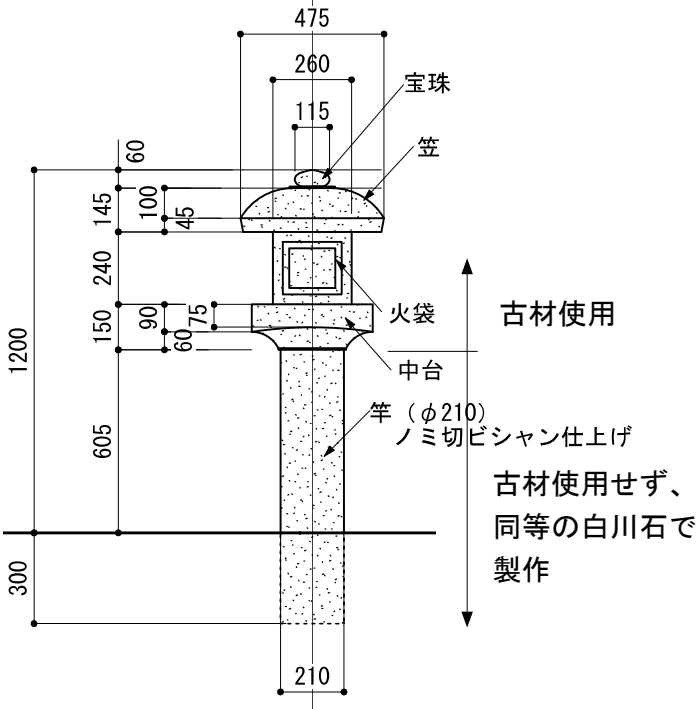
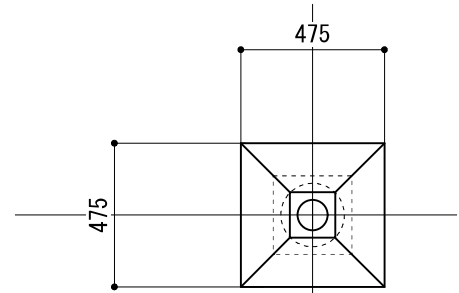
写真2-10 実寸模型設置状況
(H=1320mm)



写真 2-7 四角型燈籠 古材
（白川石／江戸時代）（H=3 尺 2 寸）

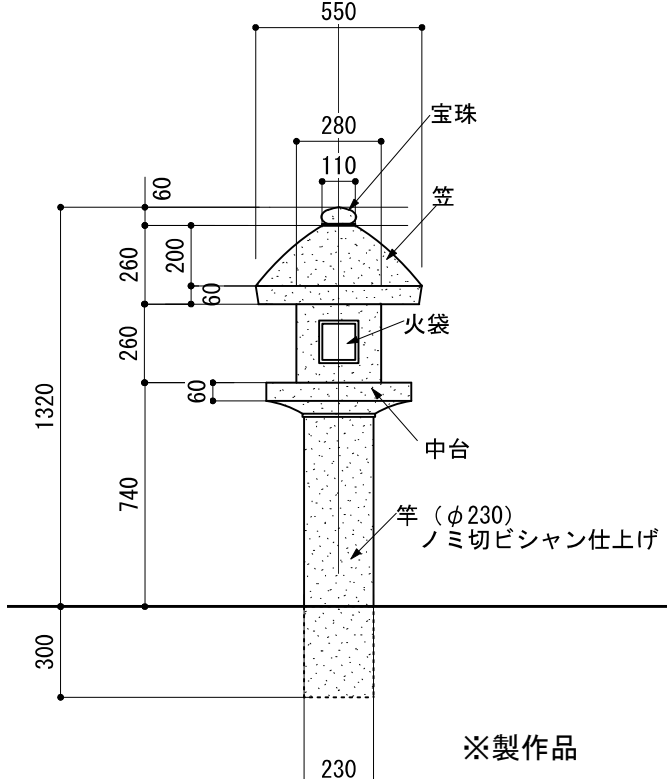
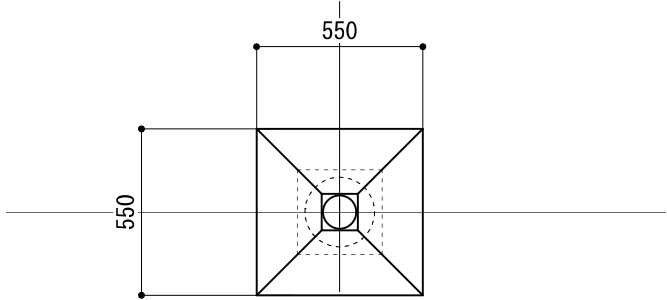
古材使用
古材不使用

写真 2-8 二之丸御庭の御茶屋
（徳川林政史研究所所蔵）



断面図 S=1:25

図 2-24 四角型燈籠構造検討図 (H=1200mm)



断面図 S=1:25

図 2-25 四角型燈籠構造検討図 (H=1320mm)

オ 標柱

(ア) 前回部会等までの検討済事項

- ・ 標柱は、製作品を設置する。
- ・ 正四角柱で上面の掘り込みは円形とし、寸法は W240 × D240 × H1200 程度とする。
（根入れは施工時に調整する。）
- ・ 鉢の縁は、1 寸以上とする。
- ・ 寸法はW270×D270×H1200とする。表面はノミ切りビシャン仕上げとし、各面1分5厘程度のムクリ仕上げとする。
- ・ 水鉢の掘り込みは、φ180×H130とし、水面を安定化させるため、1 分5厘程度内側にふくらみを持たせる。縁は45mmとする。
- ・ 側面の文字（東西南北）の彫り込みは薬研彫りとする。
- ・ 石材は、市場性、加工のしやすさを考慮に入れ、庵治石中目、白石島白石、または岡崎産石材とする。

(イ) 今回検討事項

- ・ 根入れは総深さ600mmとし、施工時に高さを調整する。GLから深さ300mmまで加工し、さらに300mmは荒石とする。

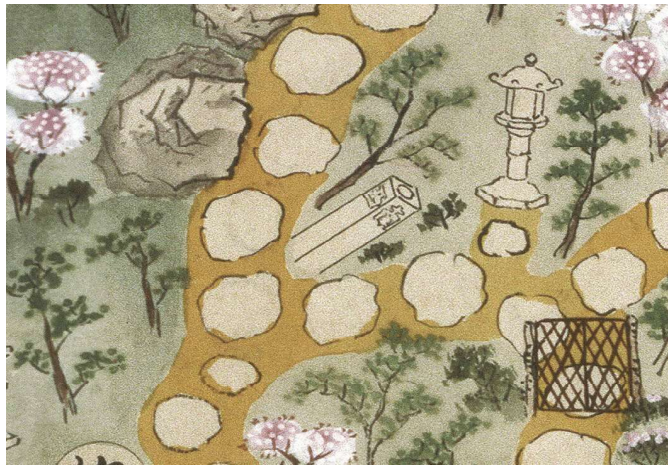


図 2-26 標柱『御城御庭絵図』部分
（名古屋市蓬左文庫所蔵）

図 2-27 標柱『尾二ノ丸御庭之図』部分
（徳川美術館所蔵）

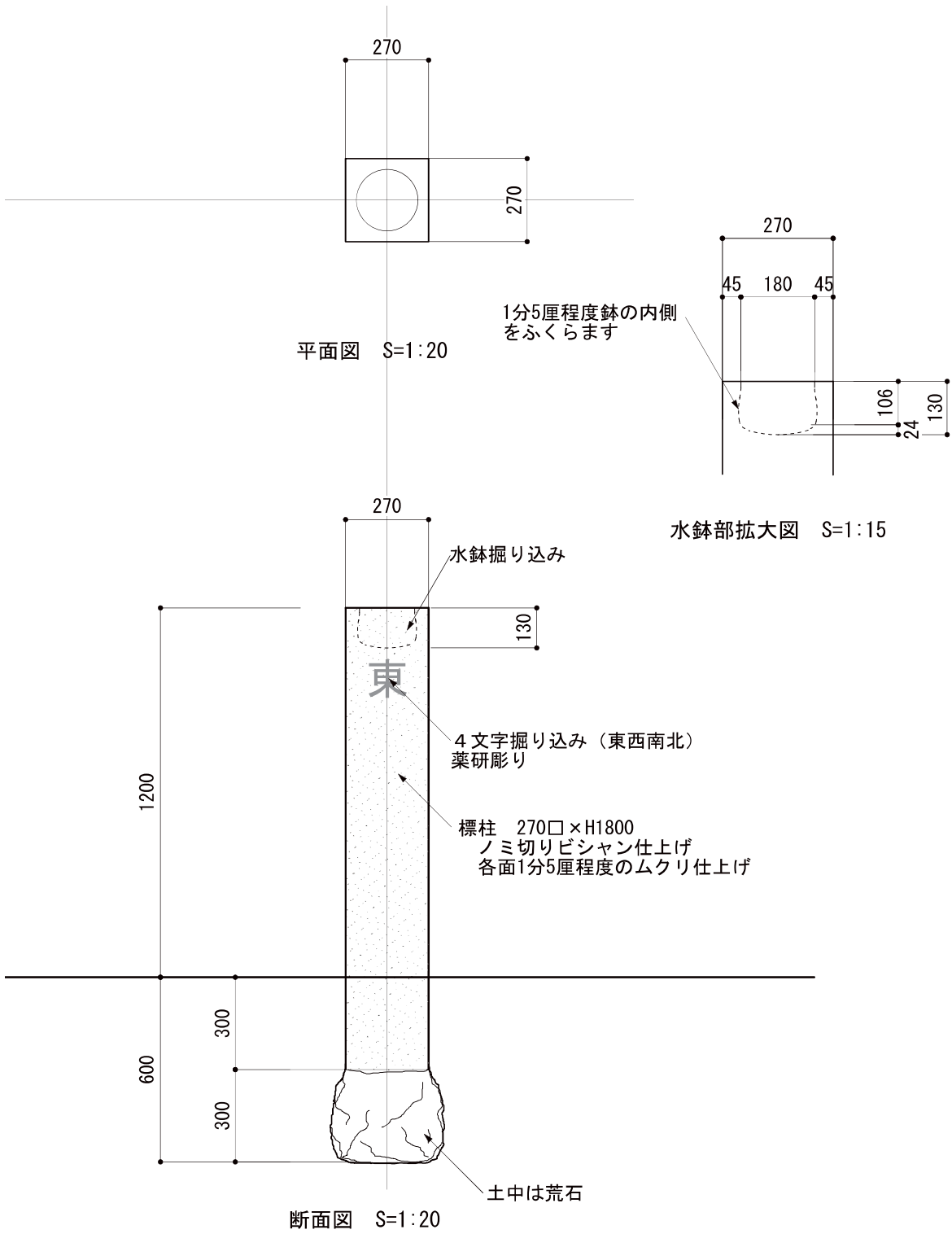


図 2-28 標柱構造検討図

(4) 枝折戸の構造検討

ア 前回部会等までの検討済事項

- ・意匠については、戸面と支柱が描かれている『御城御庭絵図』を参考とし、支柱位置については、併せて『尾二ノ丸御庭之図』も参考とし、検討する。
- ・材料について根拠がないため、柱は、耐久性と調達の可能性を考慮し、檜材を使用する。
- ・絵図より、戸面位置は飛石と飛石の間に配置する。

イ 今回検討事項

- ・絵図より、戸は両開きと想定されることから、支柱間距離は120cmと設定する。また、戸に手をかける動作性より、高さは70cm以上と設定する。
- ・柱は檜焼杭φ60mmとする。
- ・竹材は、構造材としてマダケの丸竹を、編み付け材としてマダケの割竹を使用する。

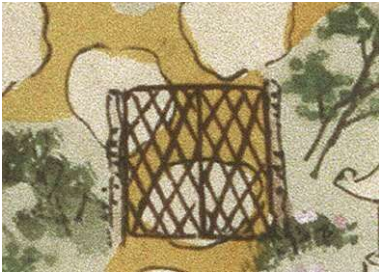
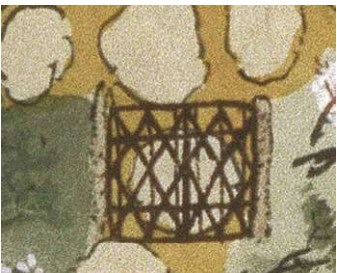


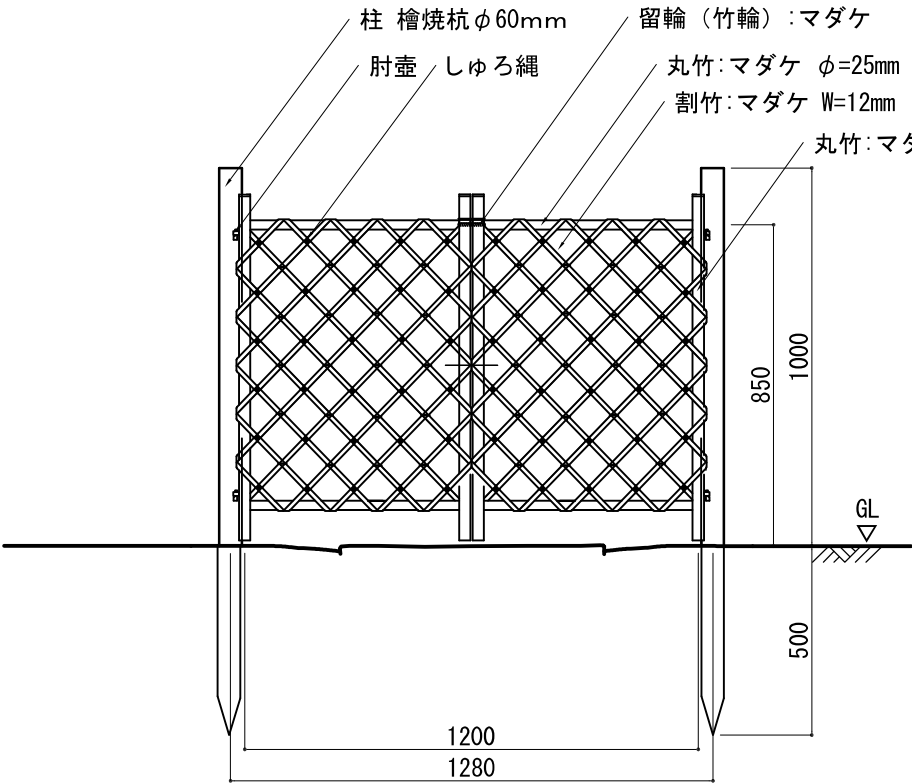
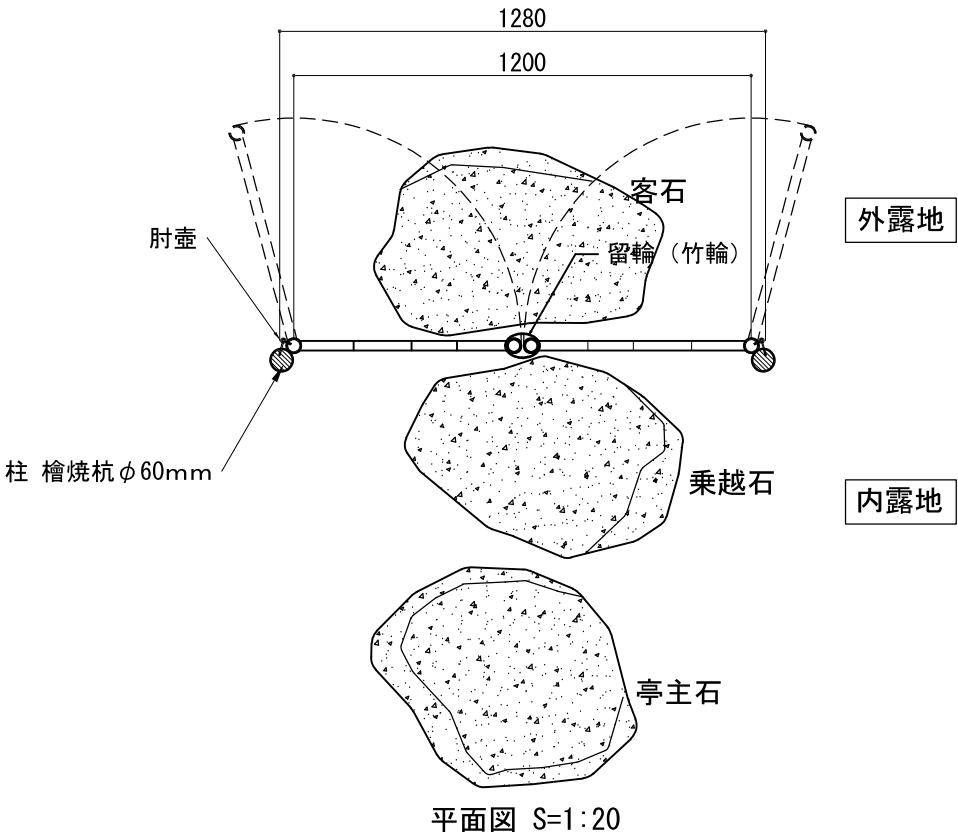
図 2-29 枝折戸（余芳・北）



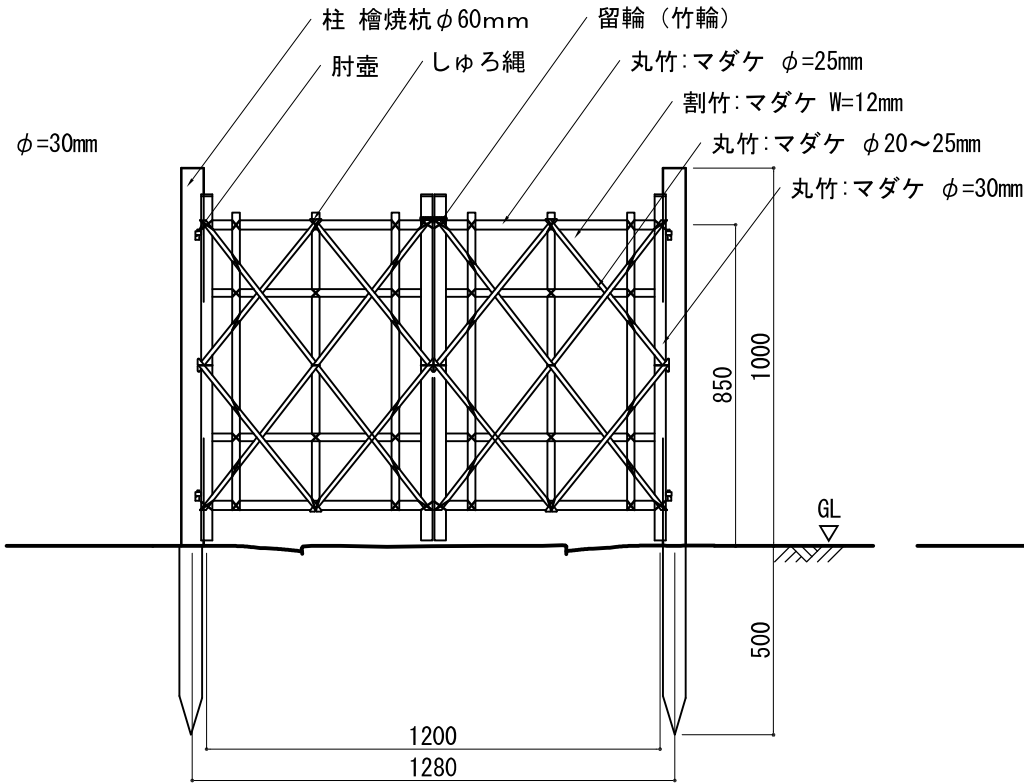
(右 90 度回転)
図 2-30 枝折戸（余芳・西）



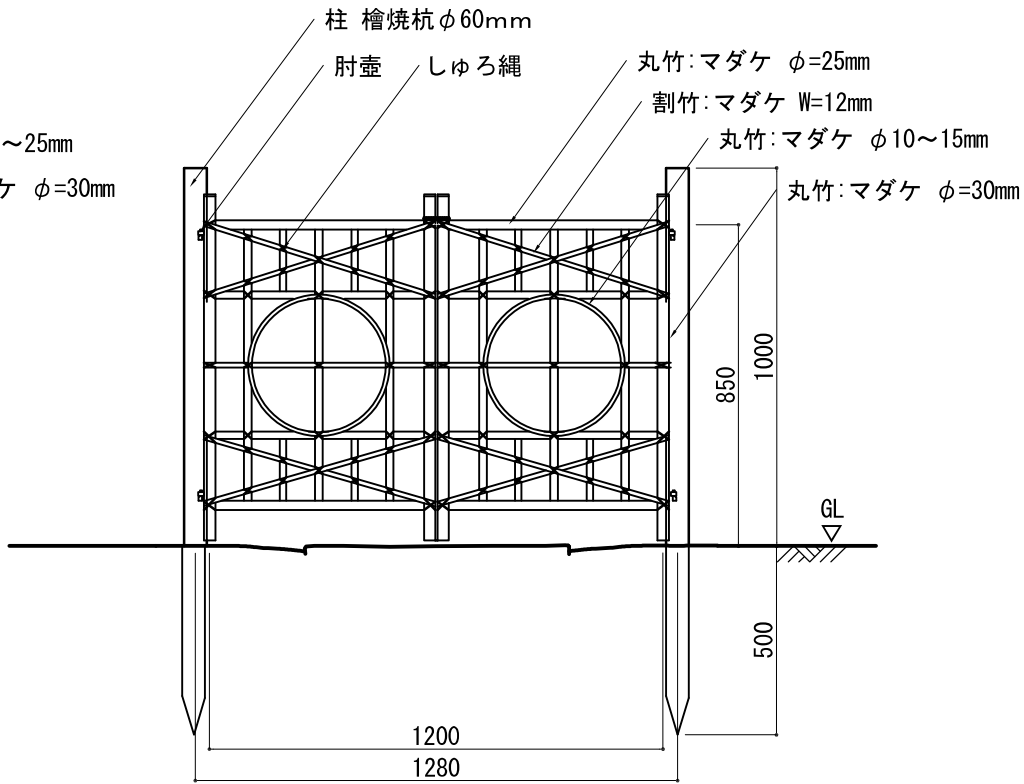
図 2-31 枝折戸（余芳・南）



余芳枝折戸（北）立面図 S=1:20



余芳枝折戸（西）立面図 S=1:20



余芳枝折戸（南）立面図 S=1:20

図 2-32 枝折戸構造検討図

(5) 袖垣の構造検討

ア 前回部会等までの検討済事項

- ・袖垣は、竹幹を立て子として垣面を構成し、押縁があり玉縁がない建仁寺垣（行）で
W = 1800mm H=1800mm とし、構造を検討する。
- ・配置について、東側は、余芳の中央の柱から南東方向に、南側は、余芳の中央の柱から
南方向に配置する。

イ 今回検討事項

(ア) 袖垣の部材

親柱は檜錆丸太φ 120 内外とし、押縁は半割竹 W60 内外、立子は割竹 W40 内外の両面張りとする。また、腐食防止のため立子は差し石の上に設置する。

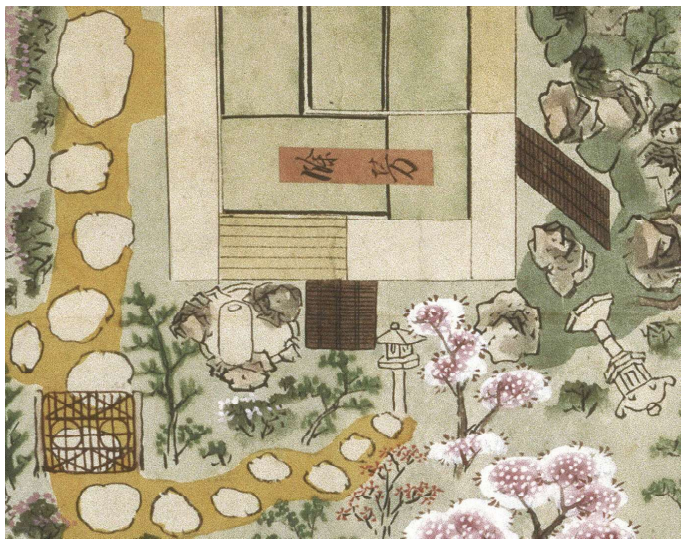


図 2-34 袖垣『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

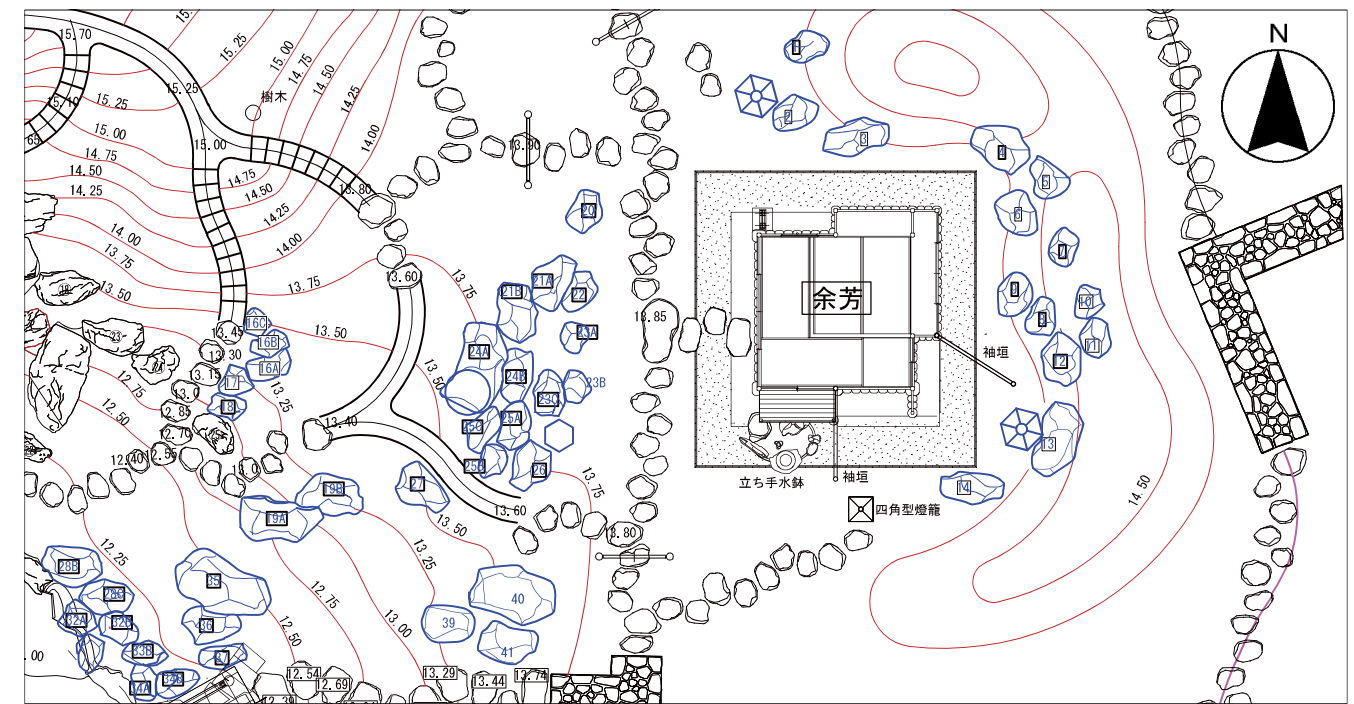
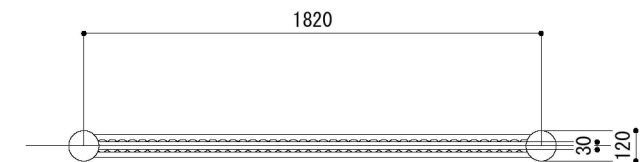
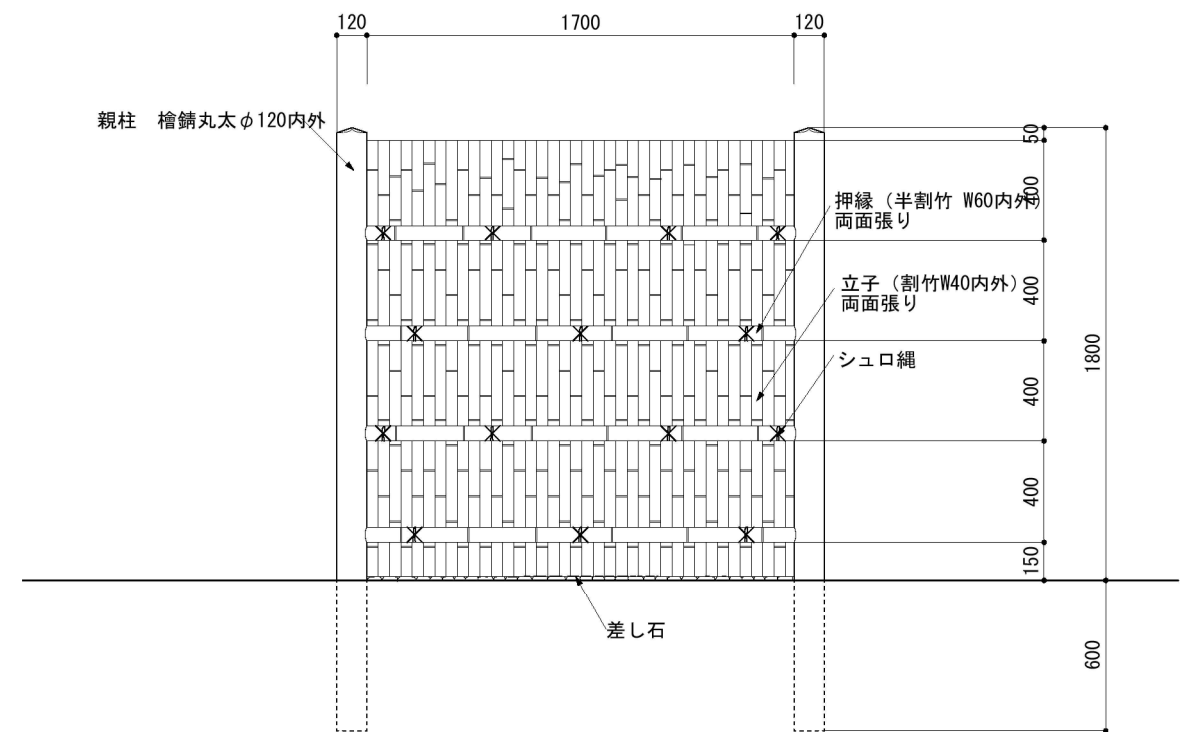


図 2-33 袖垣配置平面図 S = 1 : 150



平面図 S = 1 : 30



断面図 S = 1 : 30

図 2-36 袖垣構造検討図

図 2-35 袖垣『尾二ノ丸御庭之図』
部分 (徳川美術館所蔵)

写真 2-11 二之丸御庭の御茶屋
(徳川林政史研究所所蔵)

(イ) 袖垣の構造及び配置検討

現地にて模型（H1800×W1800）を設置し、検討した結果、下記の設計条件にて構造及び配置検討を行う。

a 袖垣（南側）（写真2-10～11）

- ・幅はW=1200mm、1800mmの2案について検討を行う。（写真はW1800）
- ・絵図より図2-43のA点を起点に南北方向に配置する。

b 袖垣（東側）（写真2-12～14）

- ・幅は1800mmについて検討を行う。（写真はW1800）
- ・絵図より図2-43のB点を起点に東西方向に配置する。
角度は0度、南に30度～45度で検討する。

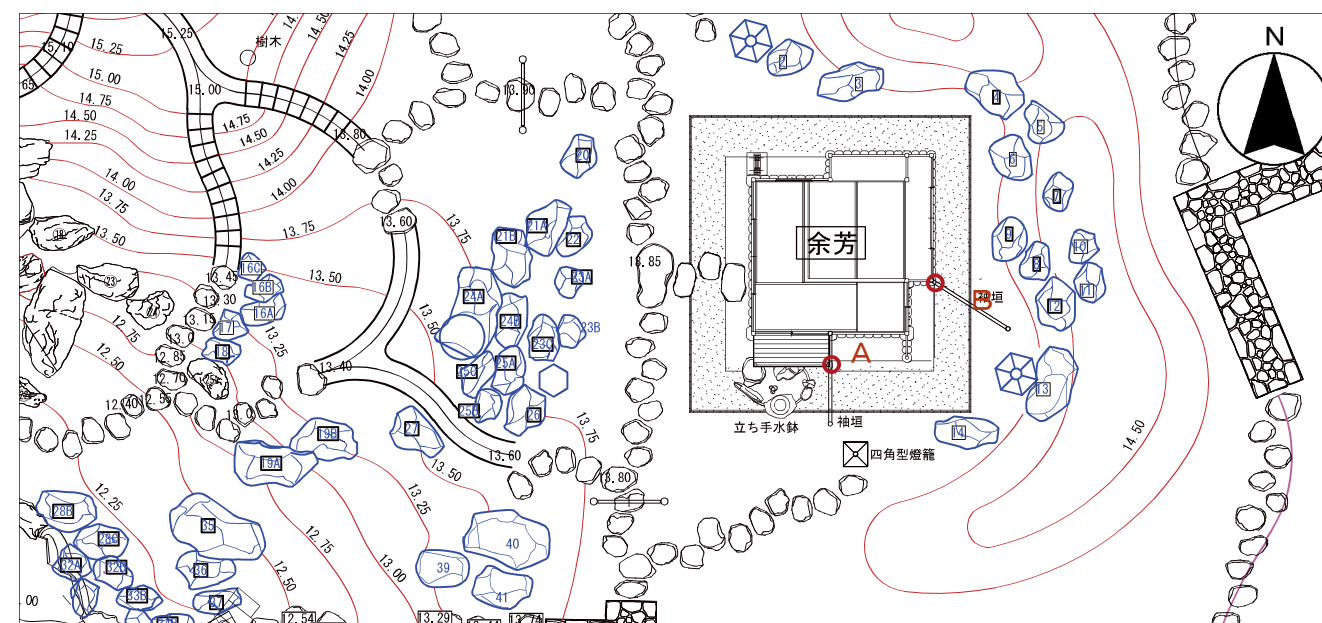


図 2-37 袖垣配置平面図 S = 1 : 150



写真2-12 袖垣（南側）実寸模型設置状況
（南側より）



写真2-13 袖垣（南側）実寸模型設置状況
（東側より）

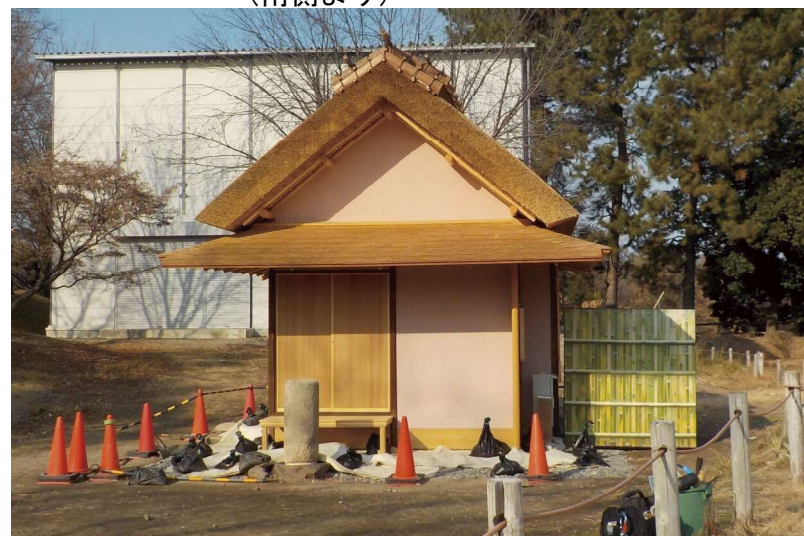


写真2-14 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度0度）
（南側より）



写真2-15 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度0度）
（南東側より）



写真2-16 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度45度）
（南東側より）

3 余芳周辺の景石配置について

(1) 余芳西側の景石配置

余芳の西側について、絵図では、余芳の上段の間からの視線の中心軸は石橋に向かっていて、実際の遺構から復元した余芳の上段の間からの中心軸は絵図からずれるため、絵図の景観とするためには、上段の間と石橋を結んだ軸を基本として景石等を配置する。

(2) 余芳東側の景石配置

余芳の東側の景石は、絵図より大きく立っている景石と丸い景石が認められ、陰陽石ではないかと考えられる。

(3) 配置案

景石の配置案を図 3-3 及び図 3-4 に示す。



図 3-1 余芳周辺 『御城御庭絵図』(名古屋市蓬左文庫所蔵)

上段の間
中心軸

図 3-2 余芳周辺 『尾二ノ丸御庭之図』(徳川美術館所蔵)

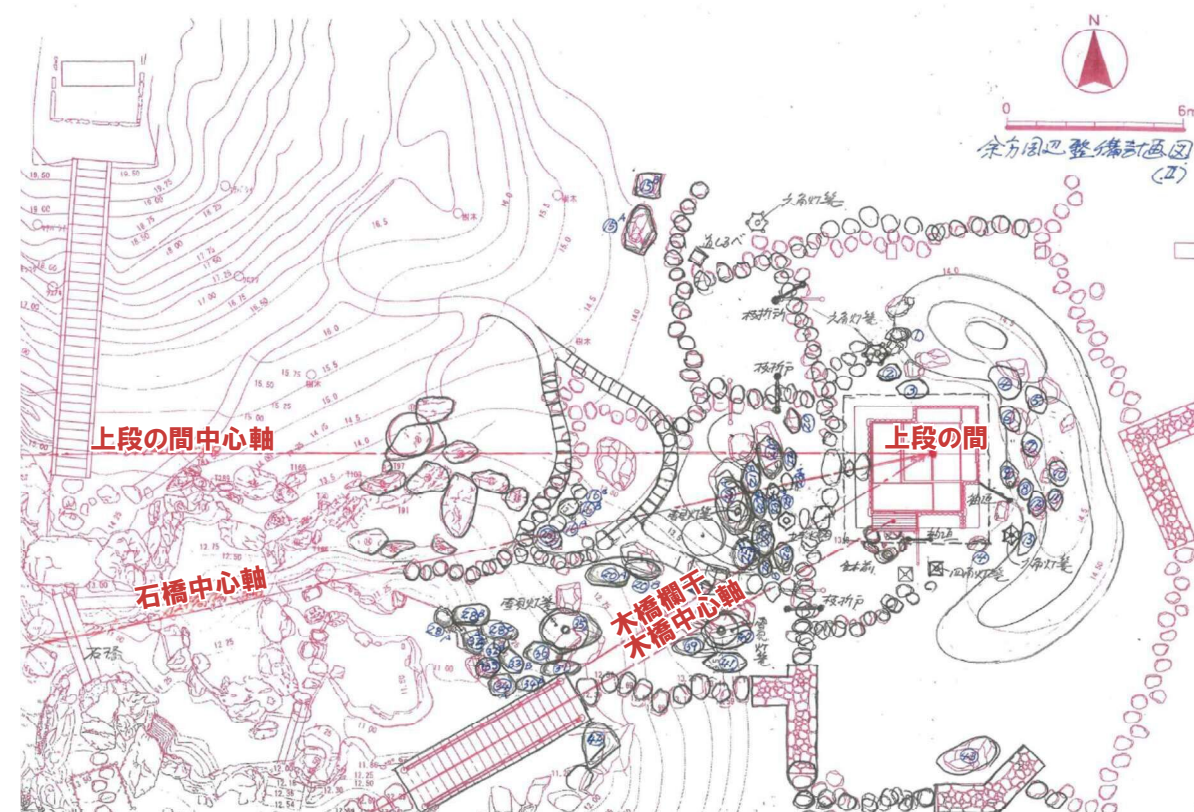


図 3-3 平面図 (配置案)

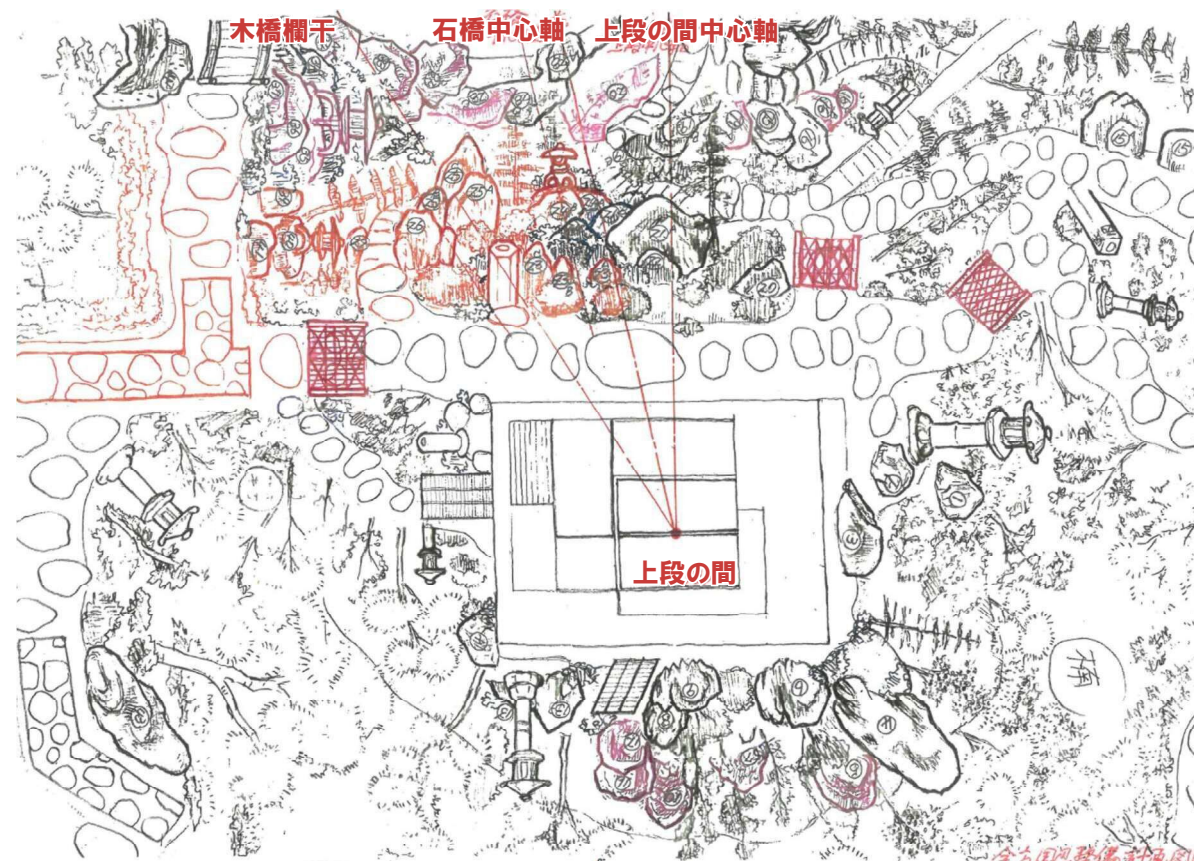


図 3-4 立面図 (配置案)

(4) 計画平面図



4 植栽

(1) 絵図の検証

ア 植栽樹種の検証

『尾二ノ丸御庭之図』には、樹木の凡例が記されている。主要な樹木のみを記し、全ての樹木を網羅してはいないが、保存修復・整備事業の補植において重要な情報となる。大きく分類すると、低木、広葉樹、針葉樹、花木に分かれる。凡例には「大木の類」として○の中に樹種名を記したものがある。大木は、権現山に多くのスギ（杣）があるほか、針葉樹ではマツ（松）、マキ（榎）、モミ（樅）、チャボヒバ（矮鶏ヒバ）がある。常緑広葉樹としてはクスノキ（楠）、モチノキ（モチ棒木）、キササゲ（キササキ、キササギ）、モッコク（木斛）、ヤマモモ（楊梅）がある。このほか、落葉の大木としてボダイジュやモミジ（大紅葉）の記載もある。

『御城御庭絵図』及び『尾二ノ丸御庭之図』から読み取れる植栽の特徴として、サクラ及びモミジと常緑広葉樹を混植し、この中にマツの植栽が見られる。マツは、築山上に群植する傾向もある。キリシマツツジは護岸際に多く見られ、東園には群植した築山もある。サツキ・ツツジ類は『尾二ノ丸御庭之図』のⅡ期以降において園路沿いに列植する部分が目立つ。このほか、園路や垣に沿ったサルスベリの列植、ドウダンツツジの群植が特徴としてあげられる。シダレザクラやウメ類は、庭園内では景観木として単体で扱う傾向にあるが、外縁ではウメ類を列植するほか、シダレザクラを数本のまとまりを持って植栽している箇所もある。

建物や通路で囲まれた植栽地は、薄緑色で着色され、地被類を表現していると読み取れる。また、色の濃淡及び石組との組み合わせによって築山や傾斜地等の地形や密生具合も併せて表現されている。品種については凡例に描かれておらず、決定的な根拠はない。

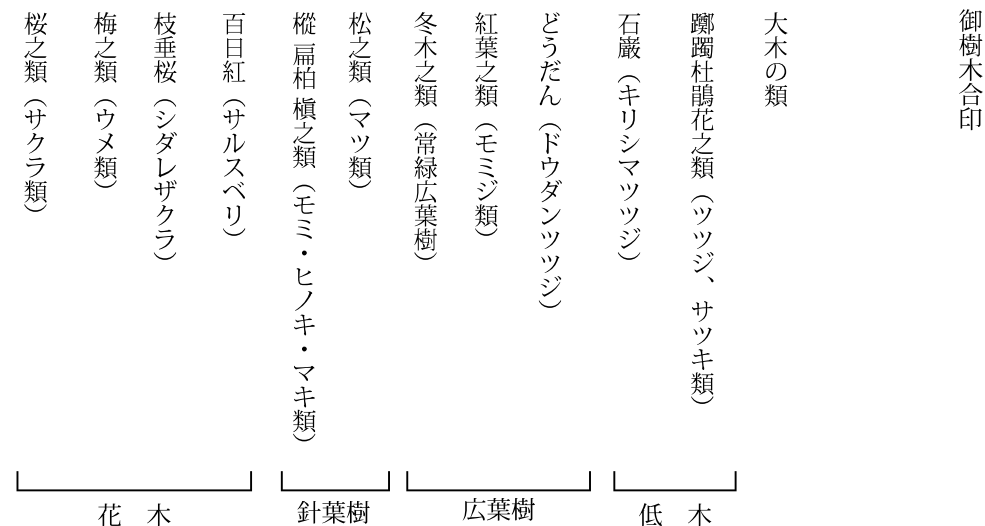


図 4-1 樹木凡例 『尾二ノ丸御庭之図』部分（徳川美術館所蔵）

イ 権現山参道付近の植栽樹木

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』の権現山参道付近の樹木について、凡例を参考に比較したところ、一部異なる樹木や、大木を示す○印内の文字が無くなっているものもあるが、概ね同様の植栽が描かれており、『尾二ノ丸御庭之図』の凡例が『御城御庭絵図』にも当てはまることが確認できる。

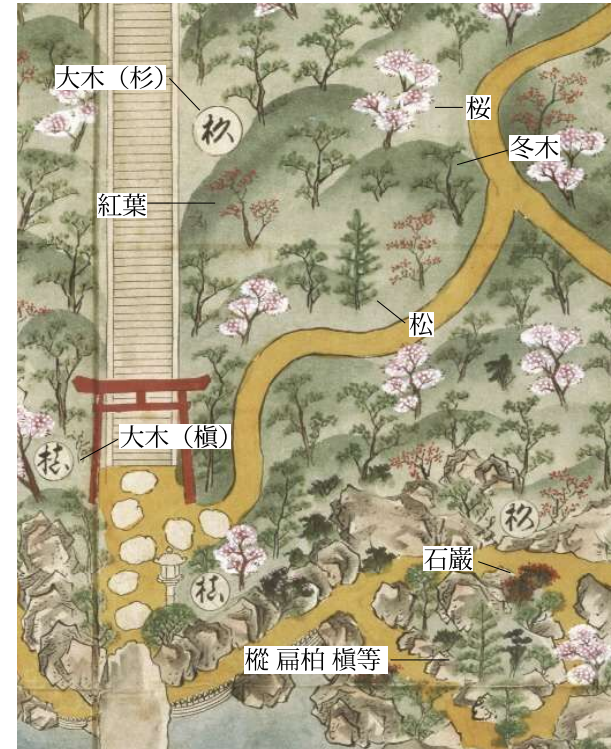


図4-2 権現山南裾部植栽 『御城御庭絵図』部分（名古屋市蓬左文庫所蔵）

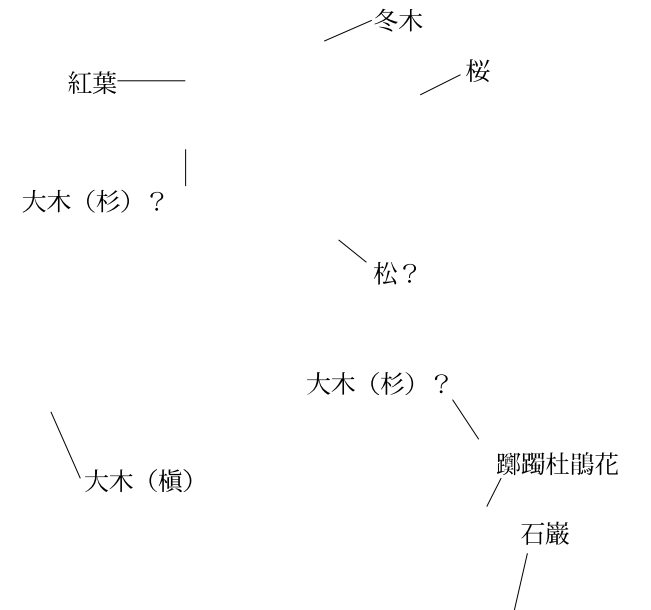


図4-3 権現山南裾部植栽 『尾二ノ丸御庭之図』部分（徳川美術館所蔵）

『尾二ノ丸御庭之図』に記された文字のない大木を記す○印は、権現山全体に11個あり、「杣」と記したものは1個である。印の位置は、『御城御庭絵図』とほぼ一致する。『金城温古録』には、寛永期から残っていた杉が失われたという記述があり、権現山の○印は『御城御庭絵図』と同様にスギであった可能性が高いものと考えられる。

『御城御庭絵図』の植木屋及び植木屋周辺にも同様の記載が4個あり、『尾二ノ丸御庭之図』によると植木屋側の2本は「松」であることが分かる。

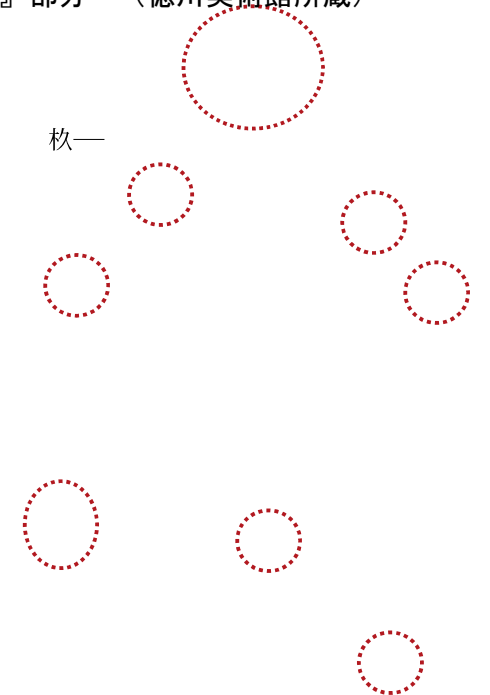


図4-4 権現山『尾二ノ丸御庭之図』部分（徳川美術館所蔵）

ウ 余芳周辺の植栽

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』の余芳周辺の樹木について、凡例を参考に、通路や建物、護岸で区画された区域ごとに比較したところ、一部異なる樹木や、大木を示す○印内の文字が無くなっているものもあるが、概ね同様の植栽が描かれており、『尾二ノ丸御庭之図』の凡例が『御城御庭絵図』にも当てはまることが確認できる。

表 4-1 植栽における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	地割	御城御庭絵図		尾二ノ丸御庭之図	
植栽	余芳	1区	大木として、「楠」、「冬青一種」、「キササギ」が記されている。大小のサクラと中、小の針葉樹、常緑広葉樹、モミジが描かれる。低木は、ツツジ類が群や列を成して描かれ、深緑色の低木は、群を成して描かれる。	概ね御城御庭絵図と同様だが、キシマツツジも描かれる。	
	北園池南	2区	中、小のサクラ、針葉樹、常緑広葉樹が描かれる。低木は、ツツジ類や深緑色の低木が、群を成して描かれる。	概ね御城御庭絵図と同様だが、サクラは描かれず、「大杣」が記される。	

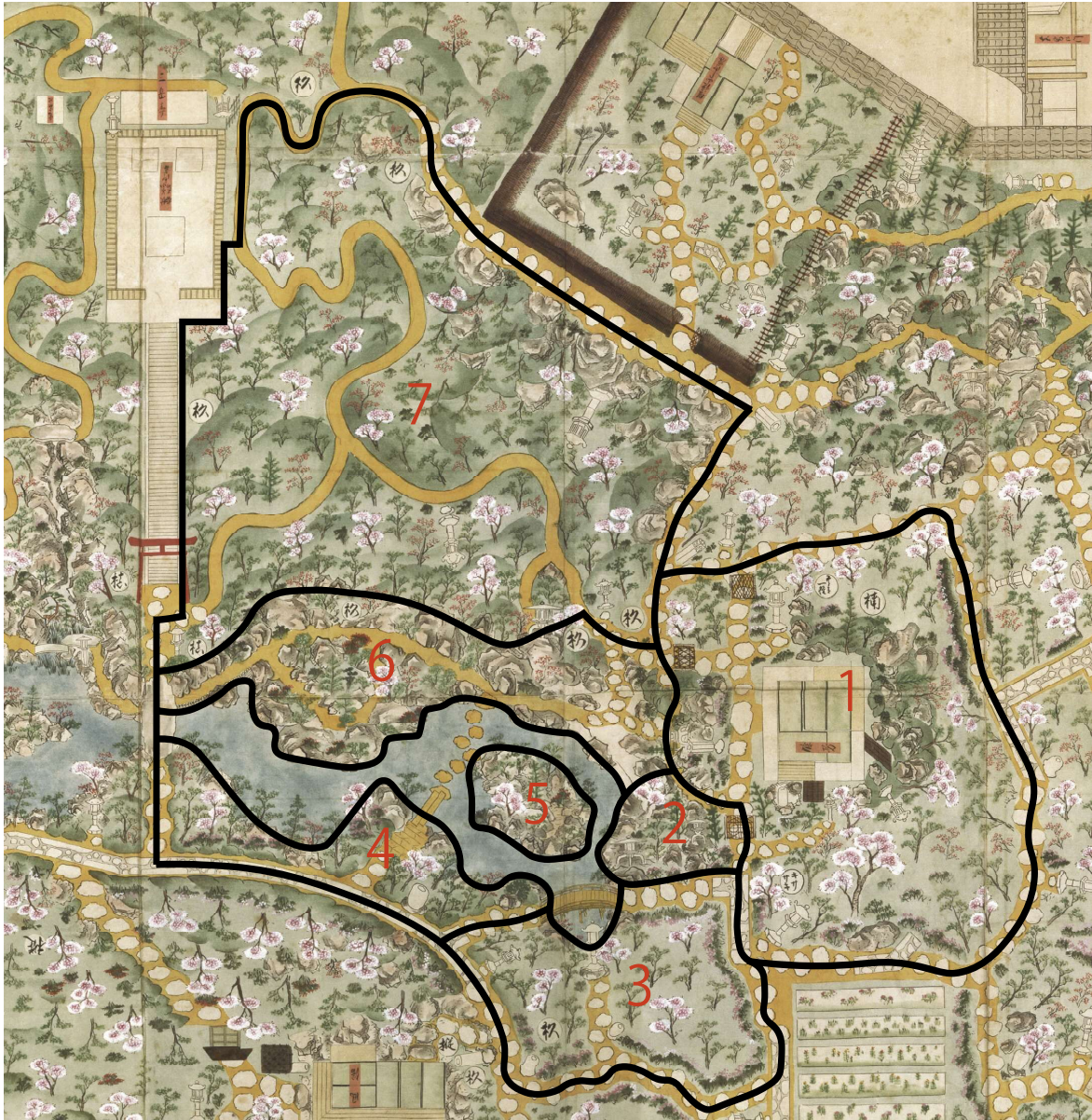


図 4-5 余芳周辺『御城御庭絵図』部分（名古屋市蓬左文庫所蔵）

事項	地割	御城御庭絵図		尾二ノ丸御庭之図	
植栽	北園池南	3区	大木として「杣」が記される。中、小のサクラと常緑広葉樹、北園池護岸にモミジが描かれる。低木は、園路の北園池側にツツジが列を成して描かれ、深緑色の低木は、群を成して描かれる。	大木として「松」が記される。中、小のサクラと常緑広葉樹が描かれるが、北園池護岸にモミジは描かれない。低木は、園路の北園池側にツツジが列を成して描かれ、深緑色の低木は、群を成して描かれる。ツツジとは異なる表現でピンク色の低木が群を成して描かれる。	
		4区	中、小のサクラ、マツ、常緑広葉樹、モミジが描かれる。低木は、ツツジ類や深緑色の低木が、群を成して描かれる。	中、小のサクラ、マツ、針葉樹、常緑広葉樹が描かれるが、北園池護岸にモミジは描かれない。低木は、ツツジ類やキシマツツジ、深緑色の低木が、群を成して描かれる。また、深緑色の低木が、北園池護岸沿いに円状に描かれる。	
	北園池中島	5区	中、小のサクラ、マツ、常緑広葉樹が描かれる。低木は、キシマツツジや深緑色の低木が、群を成して描かれる。	概ね御城御庭絵図と同様だが、マツは描かれず、針葉樹が描かれる。黄緑色の低木が、群を成して描かれる。	
	北園池北	6区	サクラ、マツ、常緑広葉樹、モミジは小さく描かれる。低木は、キシマツツジ、ツツジ類、深緑色の低木が、群を成して描かれる。	マツ、常緑広葉樹は小さく描かれる。サクラとモミジは描かれていない。低木は、キシマツツジ、ツツジ類、深緑色、黄緑色の低木が、群を成して描かれる。	
	権現山	7区	大木として「榎」、「杣」が記される。中、小のサクラ、マツ、常緑広葉樹、モミジが描かれる。低木は、ツツジ類や深緑色の低木が、群を成して描かれる。また、黄緑色の低木が、石橋の北岸に円形状に描かれる。	大木として「榎」、「樅」、文字なしの円形が描かれる。中、小のサクラ、針葉樹、常緑広葉樹、モミジが描かれる。低木は、ツツジ類や深緑色、黄緑色の低木が群を成して描かれる。また、黄緑色の低木が、石橋の北岸に円形状に描かれる。	

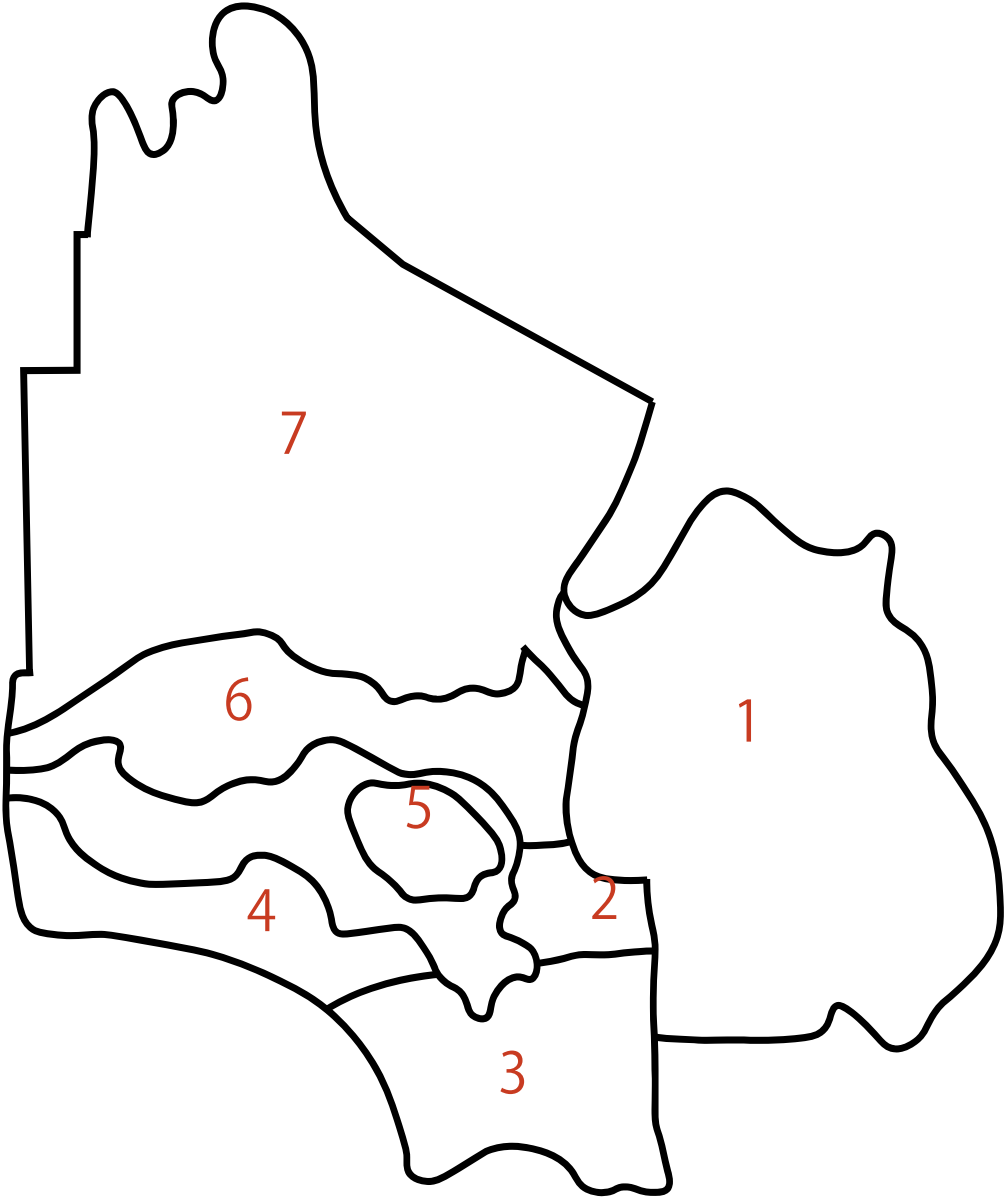


図 4-6 余芳周辺『尾二ノ丸御庭之図』部分（徳川美術館所蔵）

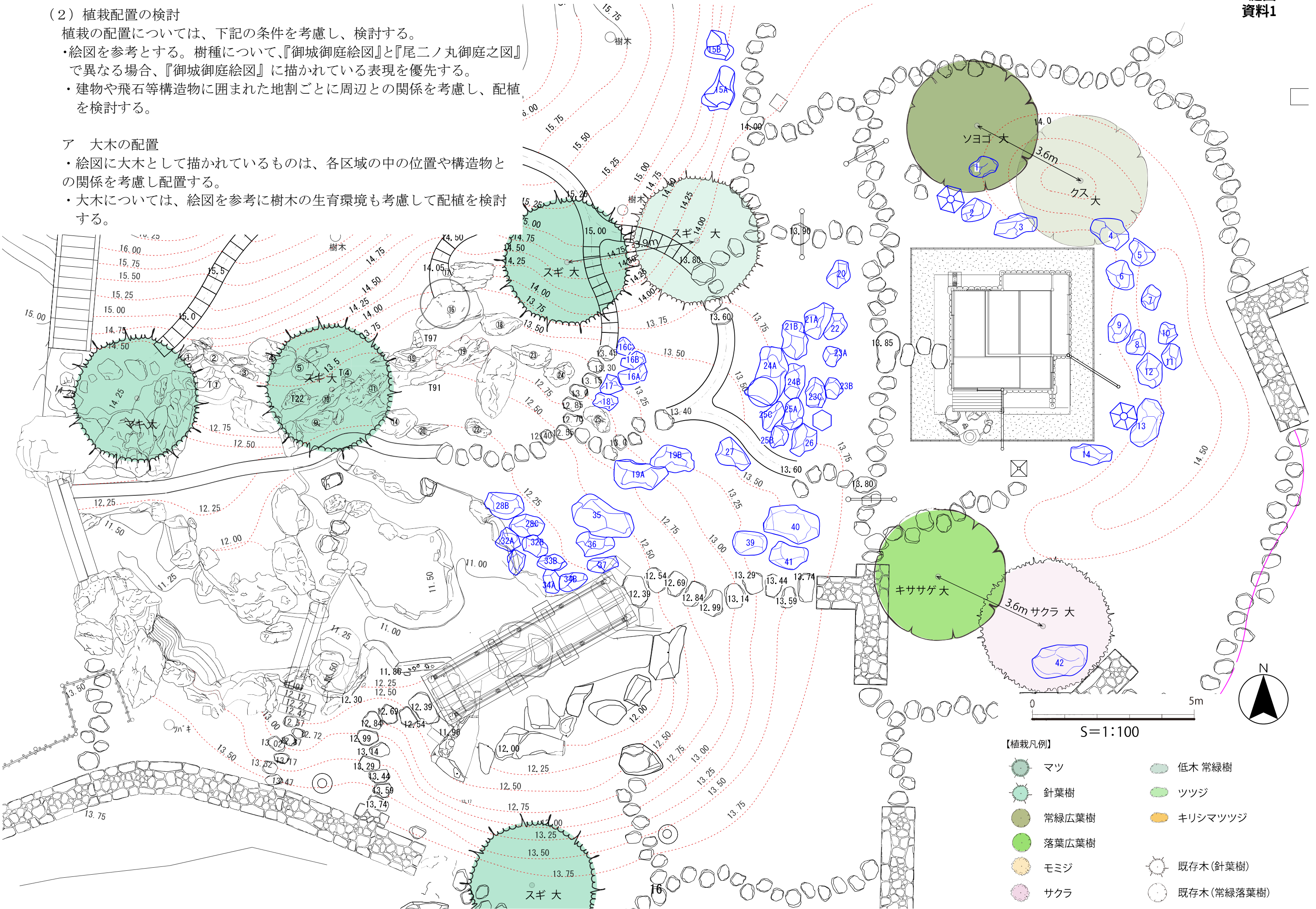
(2) 植栽配置の検討

植栽の配置については、下記の条件を考慮し、検討する。

- ・絵図を参考とする。樹種について、『御城御庭絵図』と『尾ニノ丸御庭之図』で異なる場合、『御城御庭絵図』に描かれている表現を優先する。
- ・建物や飛石等構造物に囲まれた地割ごとに周辺との関係を考慮し、配植を検討する。

ア 大木の配置

- ・絵図に大木として描かれているものは、各区域の中の位置や構造物との関係を考慮し配置する。
- ・大木については、絵図を参考に樹木の生育環境も考慮して配植を検討する。

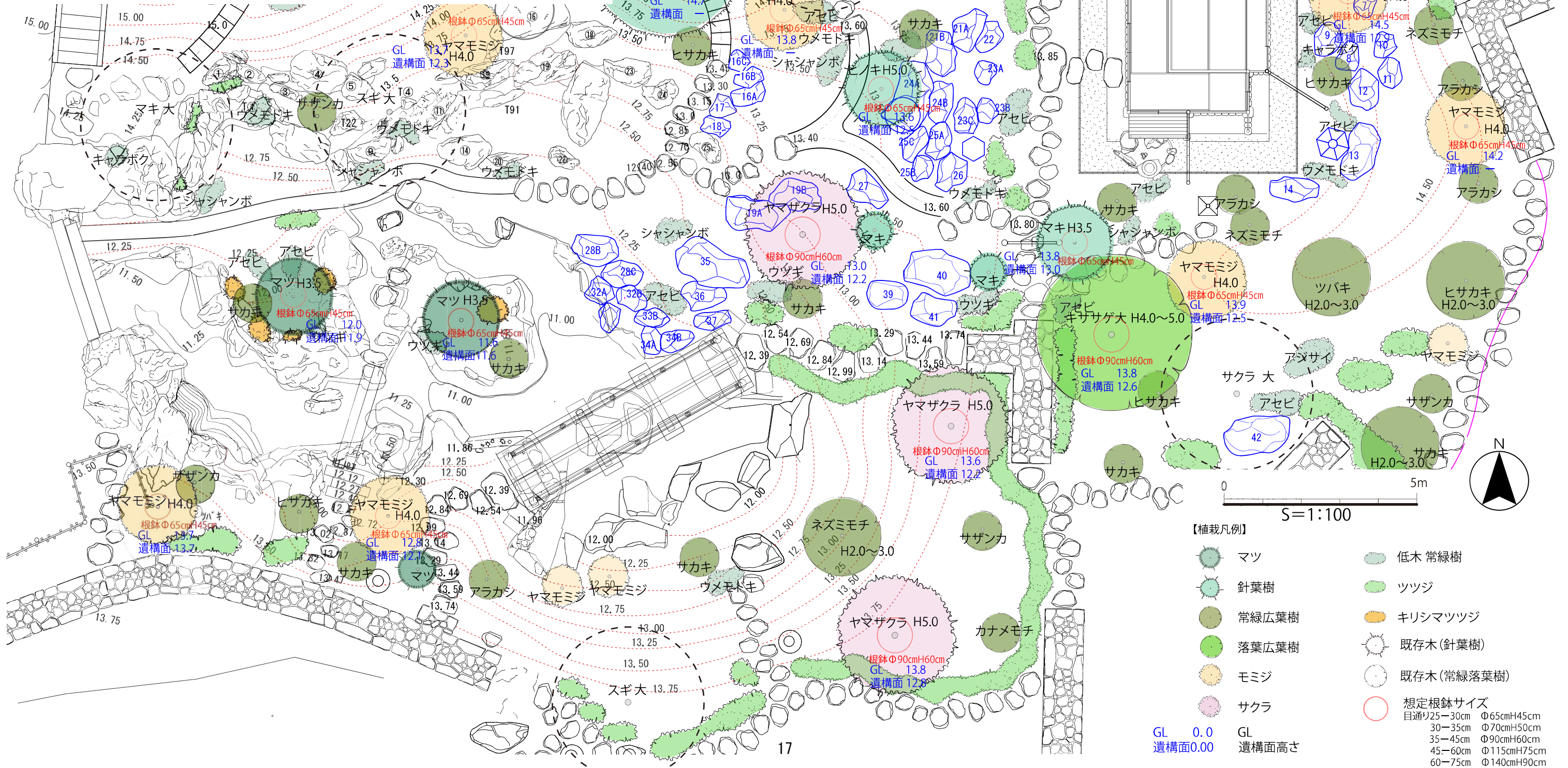


イ 高木・低木の配置

- ・絵図に大木以外の単木として描かれているものは、絵図の通りの本数を配置すると樹冠が密となるため、地割や各区域内の植栽密度を考慮し、また、現況植栽や周辺環境との調和を図り、配植する。
- ・絵図に低木の群植として描かれているものは、各区域の中の位置や構造物との関係を考慮し配置する。

ウ 植栽時の留意点

- ・植栽の土壌改良については、植穴掘削土にバーク堆肥、発酵鶏糞を混合し緩効性化成肥料の施肥を行う。植穴深及び樹木支柱については、地下の遺構に留意し適宜決定する。
- ・遺構に近接する箇所は、遺構保護のため防根シートを敷設する。



(3) 樹種の検討

絵図では針葉樹や落葉広葉樹、常緑広葉樹（大木のみ）、花木、低木の一部について、凡例及び大木の文字にて樹種が表現されているものの、常緑広葉樹（大木除く）と低木については、樹種が表現されていない。

針葉樹、落葉広葉樹、花木は、『尾二ノ丸御庭之図』に表現されている樹種を参考に選定する。常緑広葉樹は、『尾二ノ丸御庭之図』の大木の樹種に加え、『桜御間南御庭四季之図』に表現

されている樹種と現況植栽樹種の中から『樹木の植栽と配植』（上原敬二著）に記載されている「江戸時代の庭樹」を参考に選定する。低木は、『桜御間南御庭四季之図』に表現されている樹種と現況植栽樹種の中から『樹木の植栽と配植』（上原敬二著）に記載されている「江戸時代の庭樹」を参考に選定する。

【植栽樹種 候補リスト】

高木
針葉樹
モミ類
ヒノキ類
マキ類
マツ類
スギ
チャボヒバ
常緑広葉樹
クス
ソヨゴ
モチ
モッコク
ヤマモモ
落葉広葉樹
キササゲ
モミジ類
ボダイジュ
花木
サクラ類
ウメ類
シダレザクラ
サルスベリ
低木
キリシマツツジ
ツツジ類
サツキ類
ドウダンツツジ

■：余芳周辺に描かれる樹種

高木	低木
常緑広葉樹	アジサイ
カナメモチ	ウメモドキ
カシワ	オキナスギ
サカキ	クチナシ
ネズミモチ	キャラボク
モッコク	ドウダンツツジ
モチ	フィリジンチョウゲ
ヤマモモ	フィリヤツデ
花木	
サザンカ	
ツバキ	
ギンモクセイ	

高木
常緑広葉樹
カナメモチ
サカキ
ヒサカキ
マサキ
花木
サザンカ
トベラ
低木
アオキ
アセビ
ウツギ
ウメモドキ
シャシャンボ

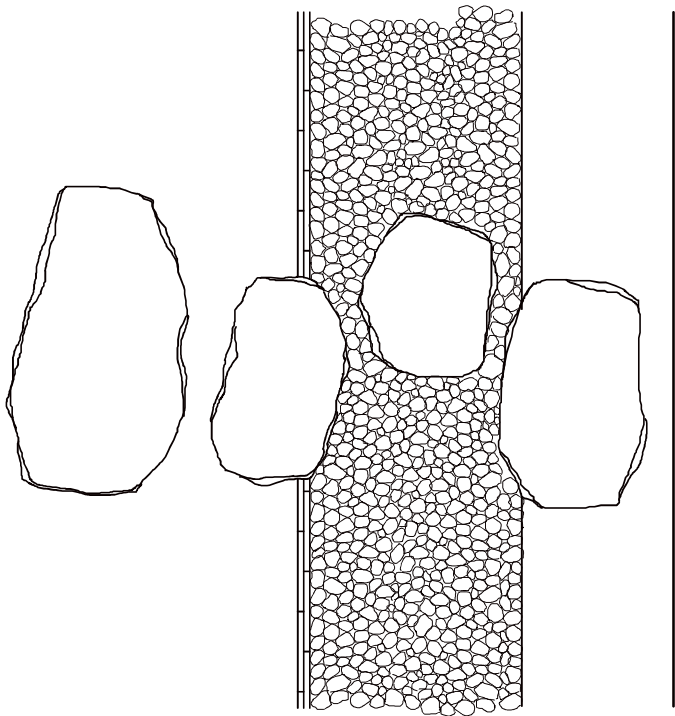
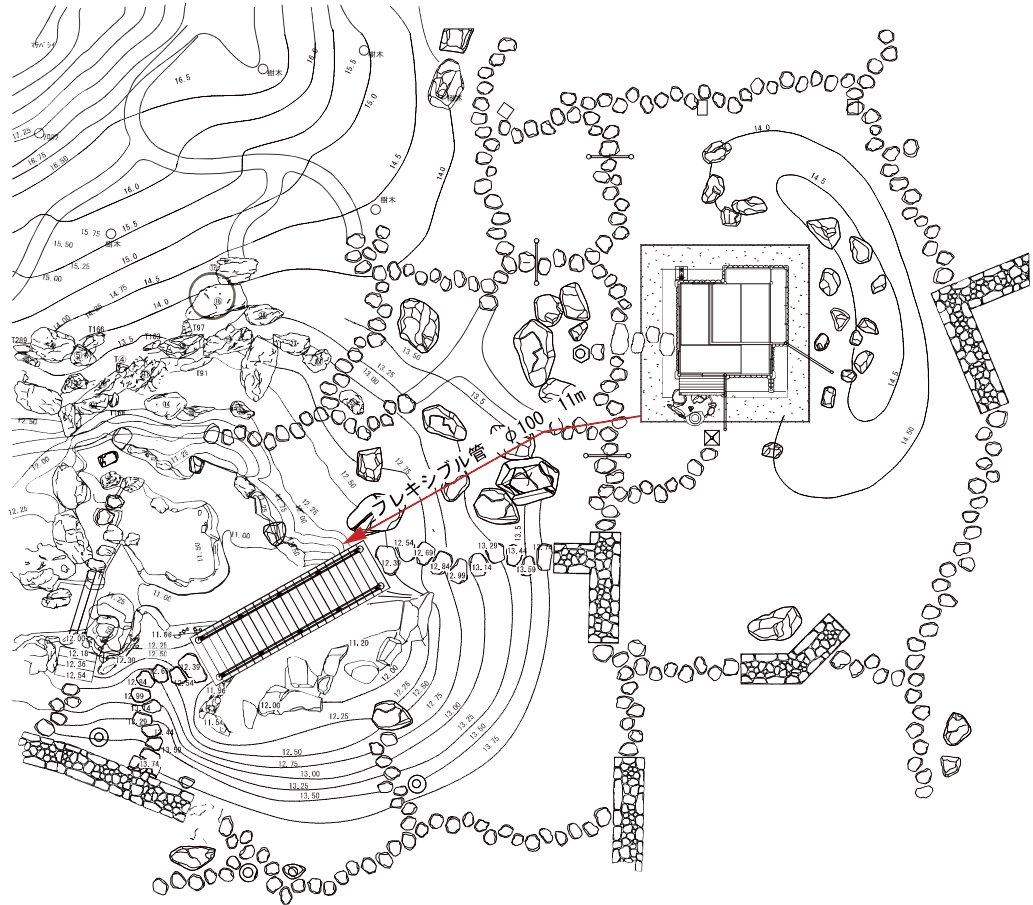
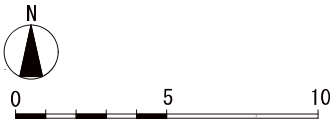
図 4-7 『桜御間南御庭四季之図』（部分）（名古屋市蓬左文庫所蔵）

表 4-5 現況植栽樹樹種

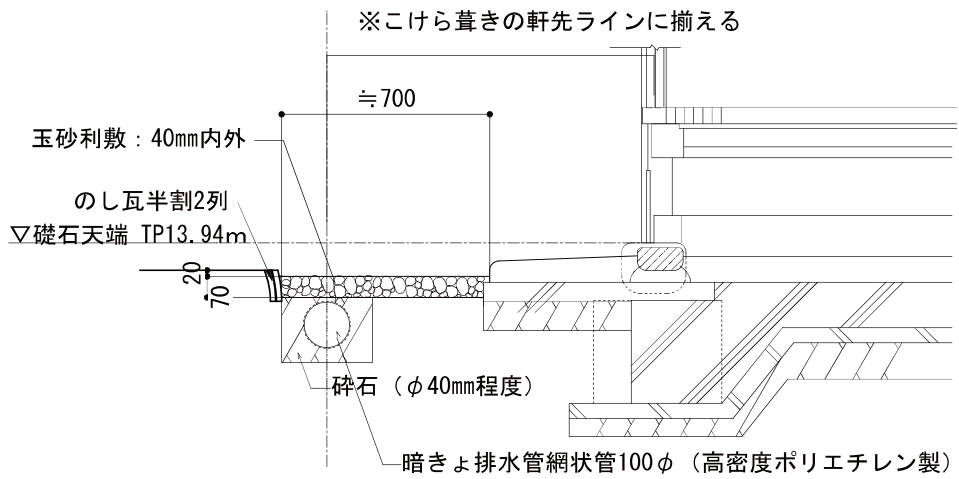
針葉樹	中高木	低木
アカマツ	サンゴジュ	ボダイジュ
クロマツ	シラカシ	マルバチシャノキ
タギョウショウ	スダジイ	モミジ
イチイ	タブノキ	ヤマグワ
イヌマキ	タラヨウ	ヤマモミジ
カイヅカイブキ	ツゲ	花木
カヤ	ネズミモチ	サザンカ
サワラ	ヒイラギ	ツバキ
スイリユウヒバ	ヒイラギモクセイ	トベラ
スギ	ヒサカキ	ウメ
タマイブキ	フエージョア	サクラ
ツガ	マサキ	コブシ
ニオイヒバ	マテバシイ	サルスベリ
ヒノキ	マルバヒイラギ	ハゼノキ
モミ	モチノキ	ハクモクレン
ラカンマキ	ムクノキ	ハナミズキ
イチョウ	モッコク	ボケ
常緑広葉樹	ヤブニッケイ	ムクゲ
アラカシ	ヤマモモ	モクレン
イスノキ	リョウブ	モモ
イヌビワ	落葉広葉樹	ヤマボウシ
ウバメガシ	アオギリ	フジ
カシ	アカメガシワ	その他
カナメモチ	エゴノキ	ソテツ
キンマサキ	エノキ	タケ
キンモクセイ	カキ	
クスノキ	ケヤキ	
クロガネモチ	シナノキ	
サカキ	センダン	
	ナンキンハゼ	

■：「江戸時代の庭樹」（出典：樹木の植栽と配植/上原敬二）

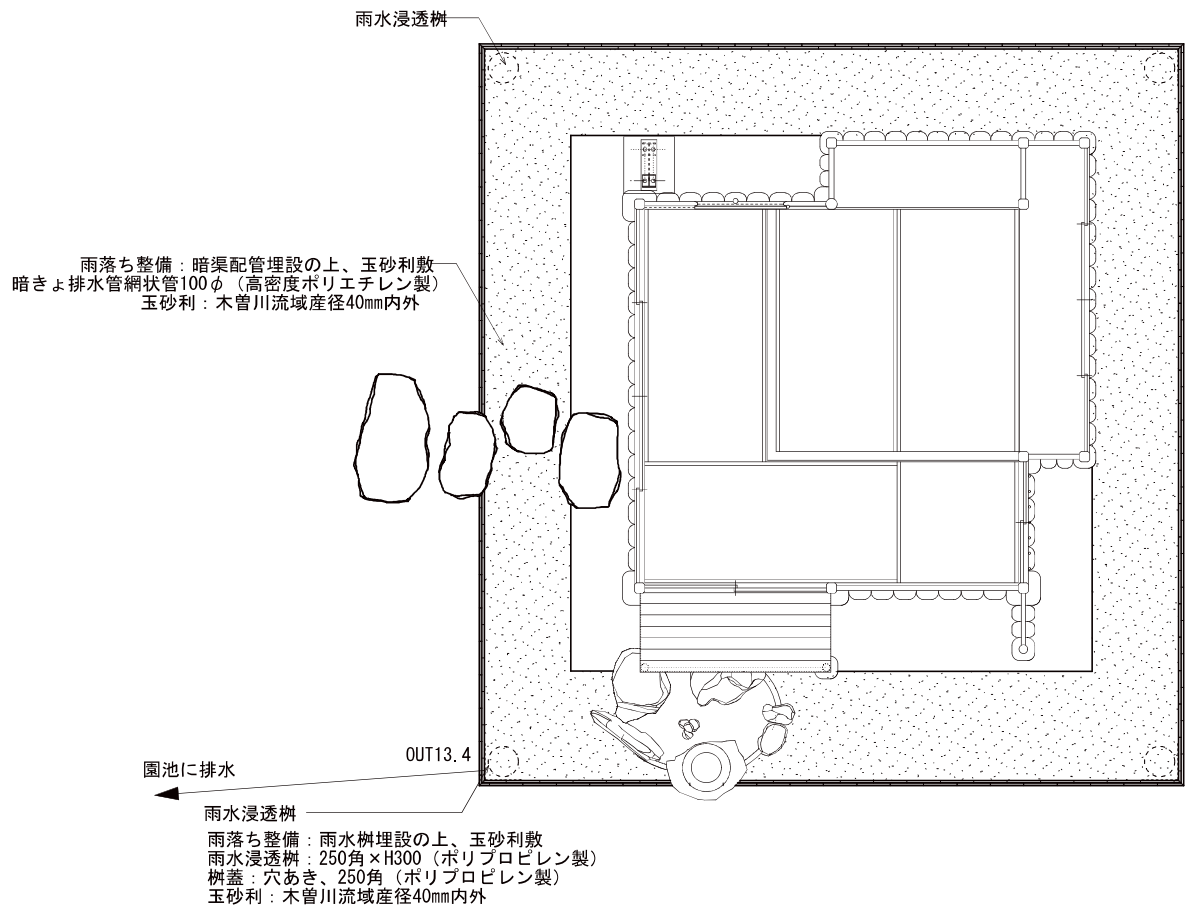
5 余芳の雨落ち



雨落ち平面図 S=1:25



雨落ち断面図 S=1:25



平面図 S=1:60



写真5-1 熨斗瓦設置状況



写真5-2 (参考) 南禅寺

6 木橋
(1) 絵図の比較検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較した木橋の検証結果は下表のとおりである。

表 6-1 木橋における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	御城御庭絵図		尾二ノ丸御庭之図
木橋	①	反り橋の表現	同左
	②	橋脚は3本組で3箇所描かれている。 貫あり。	橋脚は2本組で3箇所描かれている。 貫不明。
	③	橋桁は太い線で描かれている	不明
	④	床板の表現（2 1 枚）	床板の表現（2 2 枚）
	⑤	架木の表現	同左
	⑥	平桁の表現	同左
	⑦	地覆は太い線で描かれている	不明
	⑧	親柱の表現（2 本× 2 箇所）	同左
	⑨	中柱は描かれていない	同左
	⑩	袖柱は描かれていない	同左
	⑪	擬宝珠のある親柱が4本描かれている	同左
	⑫	斗束の表現（3 本× 2 箇所）	同左
	⑬	たたら束の表現（3 本× 2 箇所）	同左

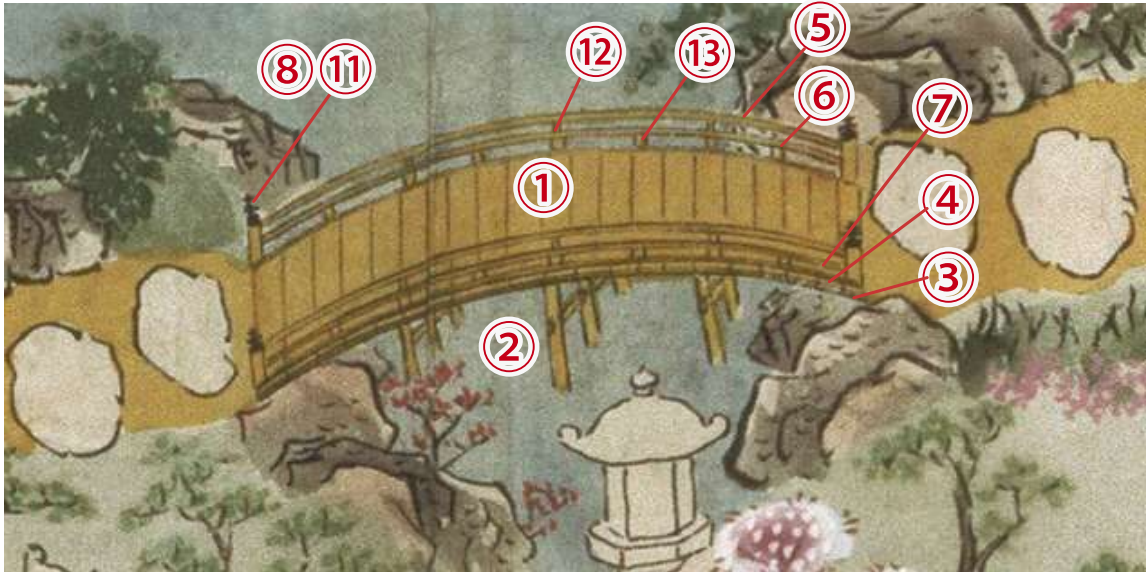


図 6-1 木橋『御城御庭絵図』部分（名古屋市蓬左文庫所蔵）

図 6-2 木橋『尾二ノ丸御庭之図』部分（徳川美術館所蔵）

- (2) 発掘調査結果の検証
- ①橋台石は、北側と南側で数量が異なる。南側の砂利上に橋台石が据えられていたと考えられる。
 - ②橋桁長は、最長で橋台が据えられている位置までと考えられる。
 - ③南側の橋台石近傍にタタキ造形物（亀）が施されている。
 - ④橋台石の天端高は、北側より南側のほうが約 20cm 低い。
 - ⑤橋脚基礎の溝は直径 15cm 深さ 5cm である。

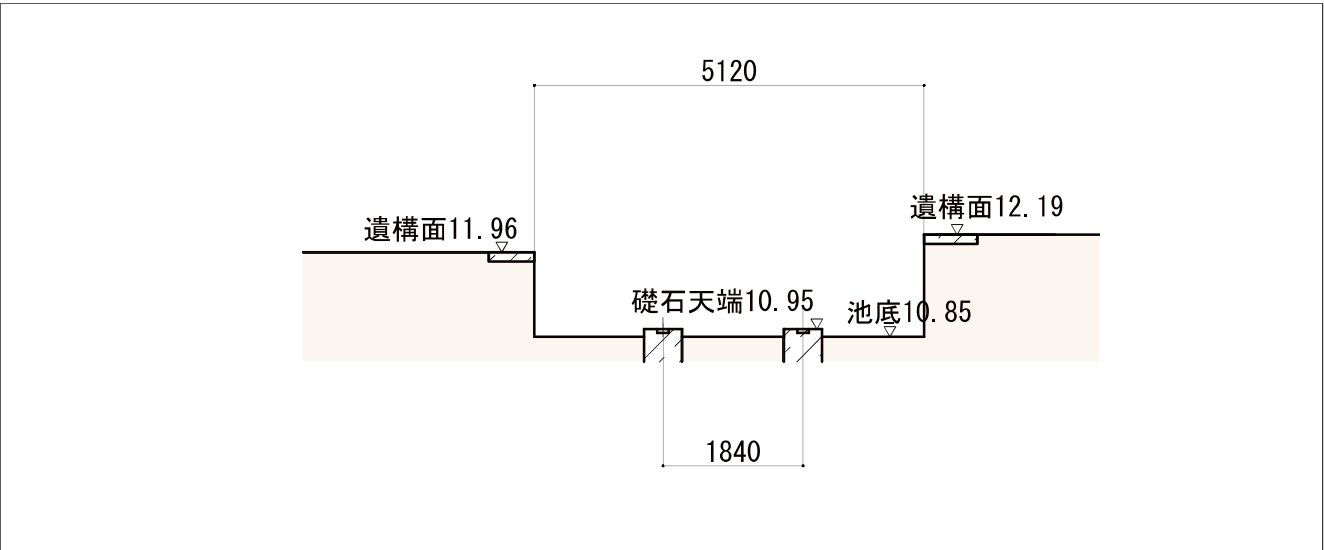


図 6-4 木橋遺構概略断面図 S = 1 : 100

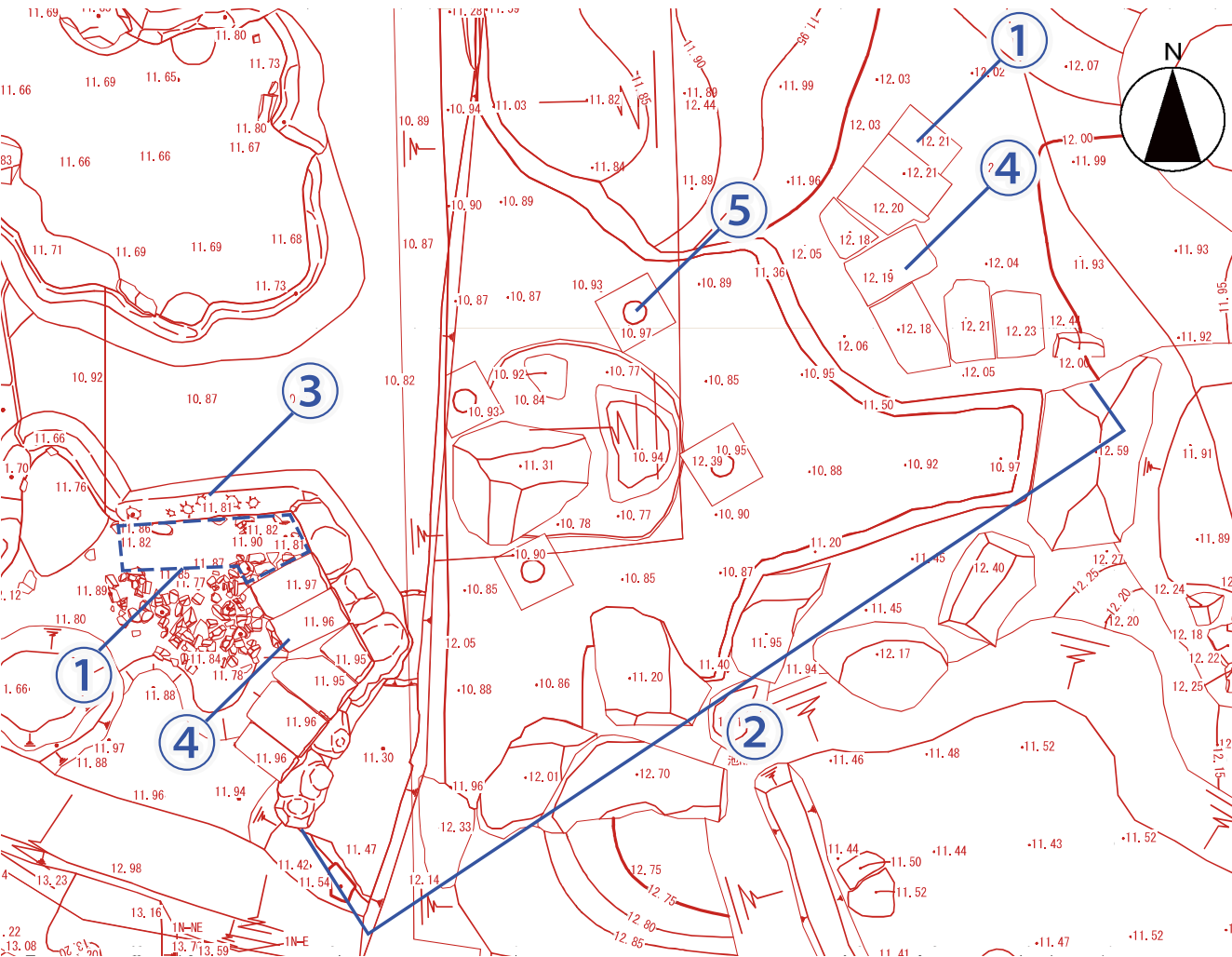


図 6-3 遺構平面図 S=1:60



図 6-5 オルソ画像（部分）

(3) 類例調査結果

現在、余芳周辺は一般公開していないが、将来的には木橋を一般公開することも視野に入れ、大名庭園や名勝庭園の類例を調査し、比較結果を下表のようにまとめた。

下部構造については、遺構から類推される全長及び幅が同様の玄宮楽々園の飛梁溪木橋を参考とする。上部構造については、平桁、親柱、擬宝珠、たたら束が絵図と同様の兼六園の花見橋、栗林公園の偃月橋を参考とする。

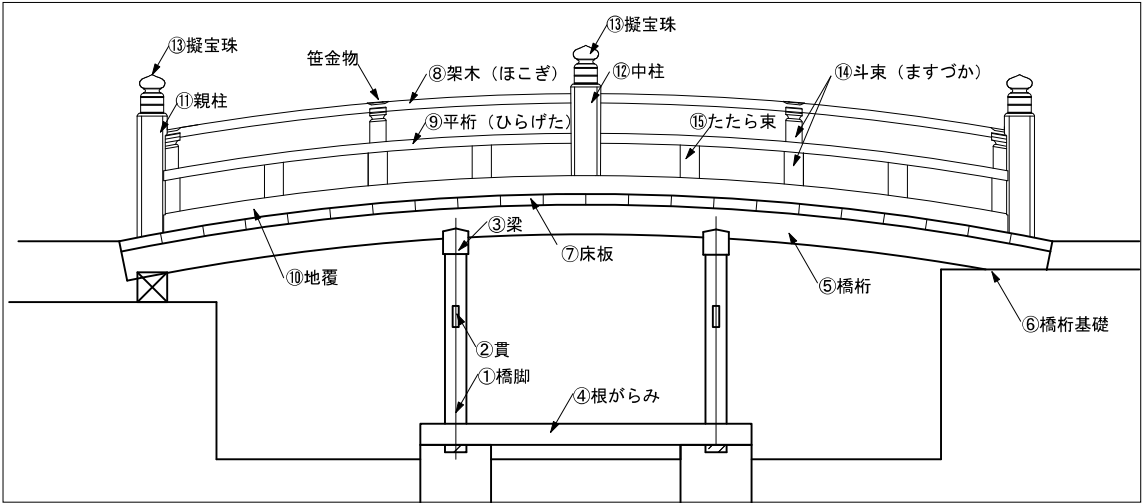


図 6-6 木橋を構成する部材

表 6-2 木橋の類例の比較検証結果

庭園名称		名勝二之丸庭園 (愛知県名古屋市)	名勝玄宮楽々園 (滋賀県彦根市)	名勝玄宮楽々園 (滋賀県彦根市)	特別名勝兼六園 (石川県金沢市)	特別史跡・特別名勝 旧浜離宮庭園 (東京都中央区)	特別名勝栗林公園 (香川県高松市)
姿図							
作庭時期		1818-1830年	1677年	1677年	1676年	1654年	1745年
木橋名称		—	飛梁溪	高橋	花見橋	中島橋	偃月橋
図面の有無		無（御城御庭絵図と尾二之丸御庭之図、現地遺構より解析）	有（2010年改修図）	有（2024年改修図）	有（令和5年改修図）	有（2016年改修図面）	有（2022年改修図面）
規格	全長	6500内外（現地遺構より）	6,655～6,669	9090	12,000	15,444	17,500
	幅	1800内外（現地遺構より）	1,515	約2,000	3,440	2,727	2,550
	通路幅(有効幅員)	—	1,183	約1,500	2,700	2,024	1,886
	勾欄高さ	—	369	747	550	836	500
	半径	—	約14.5m	約16.5m	約36m	約44m	約24m
	端部勾配	—	21.4%	25.5%	15.2%	14.8%	38.5%
	端部勾配	—	21.4%	25.5%	15.2%	14.8%	38.5%
部材	①橋脚（脚）	絵図：3本×3組 現地遺構：2本×2組	2本×2組（φ120檜丸太）	2本×2組（182×182）	4本×2組（ヒバφ210丸太）	2本×2組（檜242×242） 2本×2組（檜242×242）	2本×4組（栗八角205）
	②貫	有り（絵図より）	檜36×120	61×151	ヒバ60×160	檜50×250	栗75×200
	③梁	有り（絵図より）	檜丸太φ150	188×242	ヒバ220×160	檜273×333	檜210×300
	④根がらみ	—	無	無	無	無	檜40×200×2本
	⑤橋桁	—	2本、檜135×150	2本、檜151×242	ヒバ4本、180×180 （桁隠板200×60）	3本（檜197×380）	4本 （檜130×250×2本、 140×300×2本）
	⑥橋桁基礎	平板（現地遺構より）	Co基礎（桁直置き）	枕梁	ヒバ枕木土台220×180	Co基礎	Co基礎（桁直置き）
	⑦床板	—	檜 t 45	t 45	ヒバ210× t 70	檜152× t 70	檜260× t 70
	⑧架木（ほこぎ）	有り（絵図より）	檜75×60	151×103	ヒバφ70	檜127×75	檜φ60
	⑨平桁（ひらげた）	有り（絵図より）	無	106×76	ヒバ150×70	檜36×109	檜120×60
	⑩地覆	有り（絵図より）	檜45×90（水縁あり）	151×121	ヒバ150×110（水縁あり）	檜136×137（水縁あり）	檜140×130
	⑪親柱	4本（絵図より）	檜91×91×455（勾欄束60×60）	4本（206×206）H1256	4本（檜φ210）H1050	4本（檜182×182）H1309	4本（檜φ216）H1120
	⑫中柱	無	無	無	4本（檜φ180）H1000	無	8本（檜φ172）H1015
	⑬擬宝珠	4本（絵図より）	無	無	親柱：4本（H400） 中柱：4本（H350）	無	親柱：4本（H430） 中柱：8本（H370）
	⑭斗束（ますづか）	6本（絵図より）	無	10本（121×121）	12本 （上部：115×115、下部115×115）	14本（105×105）	10本 （上部：115×90、 下部：130×140）
	⑮たたら束	8本（絵図より）	無	12本（100×100）	18本（檜136×106）	無	20本（檜115×90）

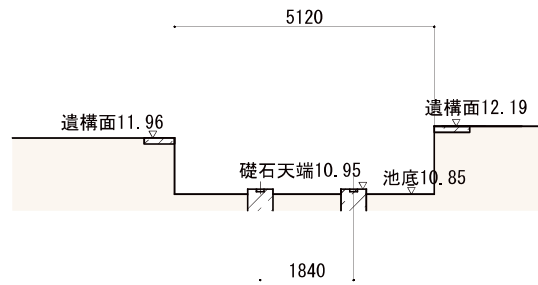
(4) 構造の検討

木橋配置案

□設計条件

木橋の設計条件は、現存する木橋遺構（橋台・橋脚基礎）を基に構造を検討する。
また、意匠及び断面形状については絵図を参考に事例調査を実施し、断面検討を行う。

- ・橋脚基礎遺構 4カ所（柱間東西1.84m、南北1.5m）
- ・橋台遺構高
西橋台11.96、東橋台12.19
- ・橋台間 5.12m



木橋遺構断面概略図

ア 前回部会等までの検討済事項

(ア) 全体構造

- ・橋長は、橋台石の検出範囲を参考とし設定する。
- ・橋幅は、橋脚の基礎間距離とタタキ護岸上部の造作物（亀）の位置を考慮し設定する。
- ・むくりは、絵図、類例調査結果及び上記の設計条件を基に検討した結果、最大勾配（端部）が30%程度の断面構造とする（次頁参照）。

(イ) 上部構造

上部構造は、床板の上に地覆とし、親柱、たたら束、斗束が平桁、架木を支える。親柱には擬宝珠を載せる。

(ウ) 材料

木材は、根拠がないため、耐久性と調達の可能性を考慮し、檜とする。

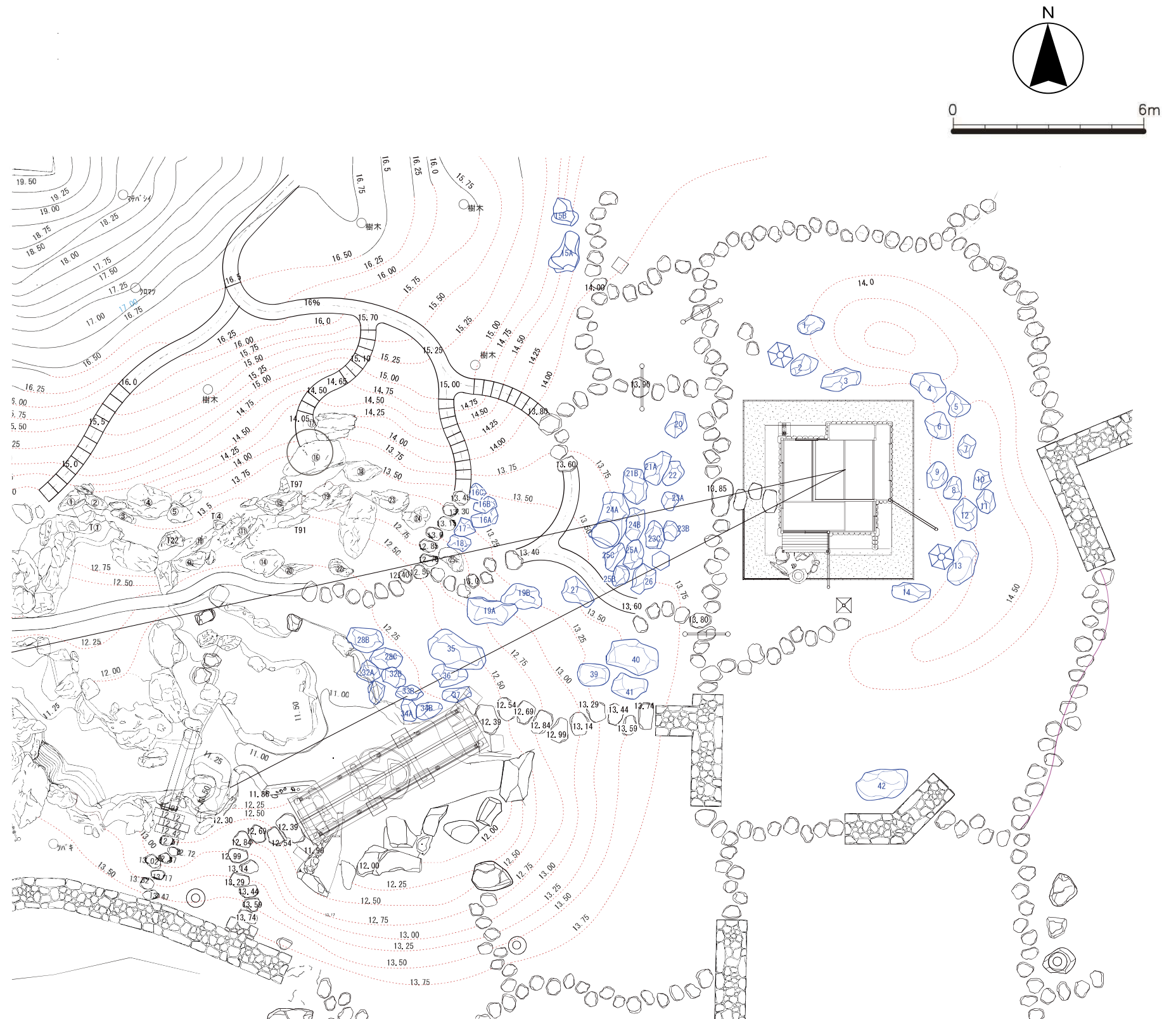
イ 今回の検討事項

(ア) 下部構造

橋脚が直接、遺構の基礎石に載る。遺構の橋台石及び橋脚と梁で3本の橋桁を受ける。橋脚は貫を通す。北岸と南岸の橋台天端高の高低差は南岸の土台で調整する。遺構である橋脚基礎石の受け穴が浅いため、ズレ止めとして基礎プレート进行被せ、橋脚を基礎穴に立て込み、ボルトでプレートと連結する。さらにその上部に根がらみを載せ、4本の橋脚を連結する。

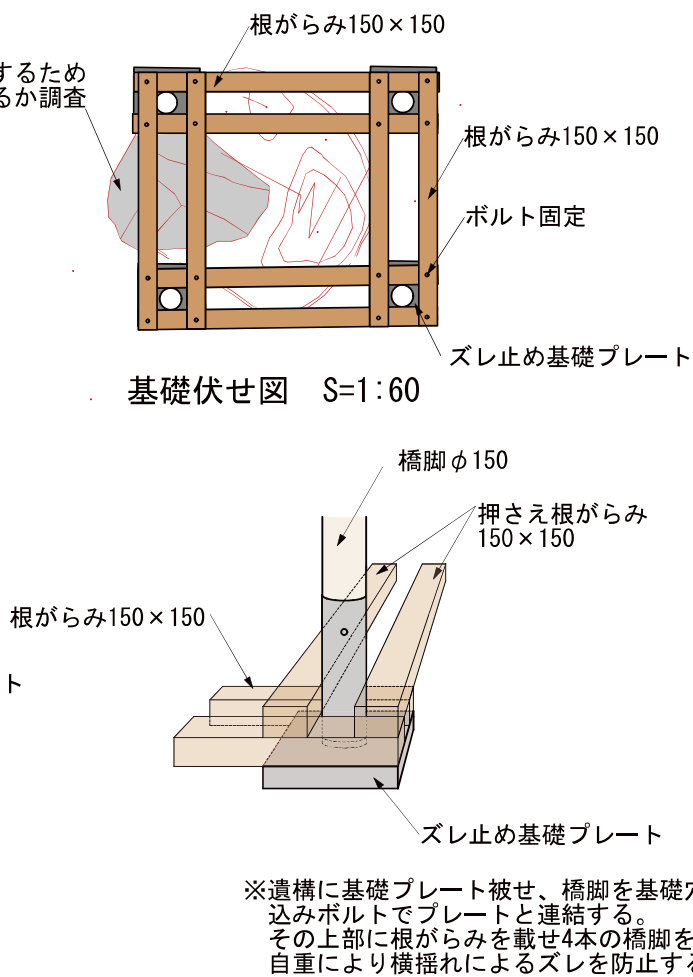
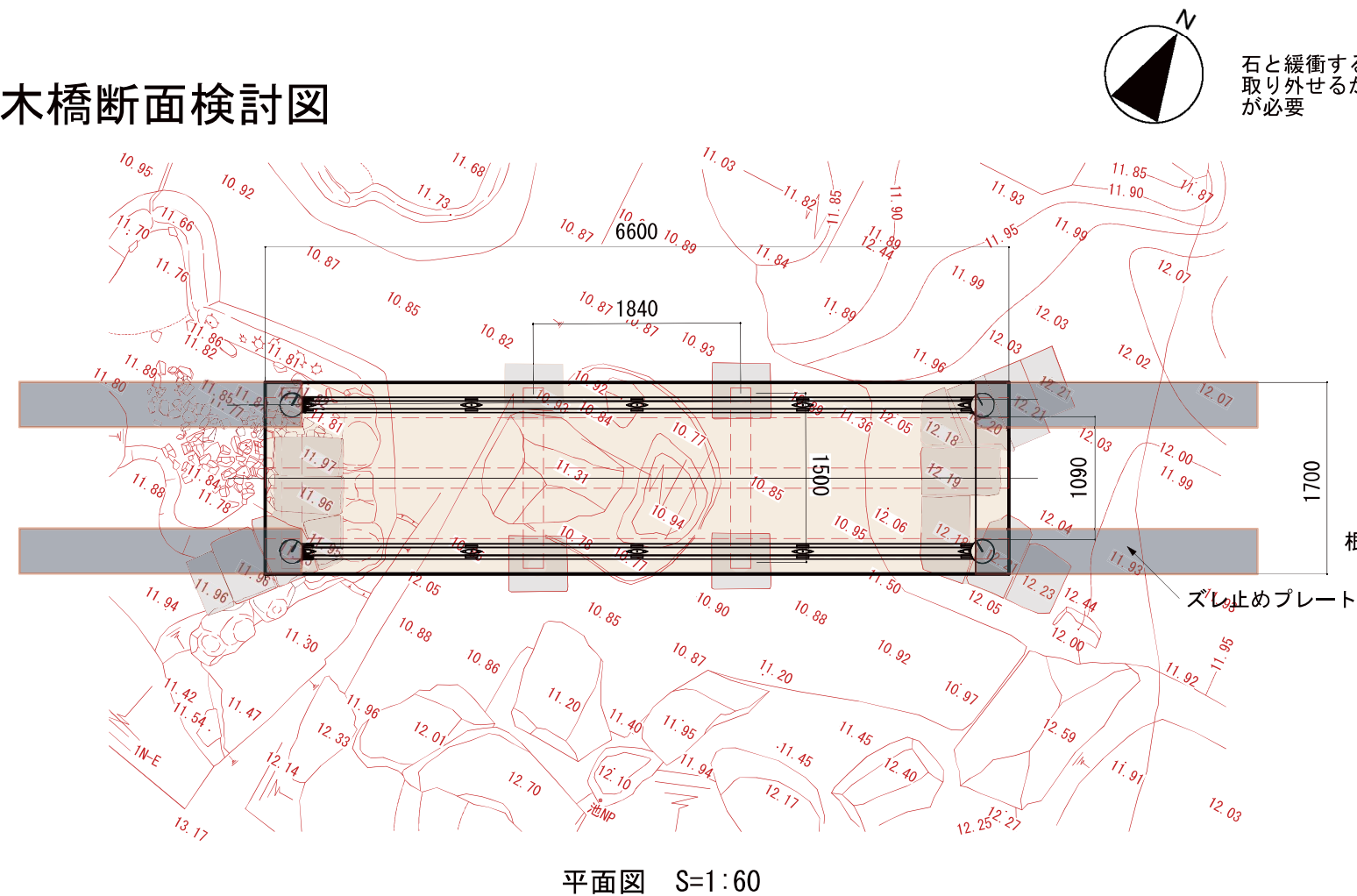
ウ今後の課題

- ・遺構保護及び安全性を考慮に入れた公開方法の検討
- ・遺構面の地耐力の検証が必要
- ・既存の橋を復元するわけではないので、遺構面やタタキ護岸への影響が懸念される。
- ・部材寸法、部材の接合方法の検討



木橋配置図 S=1:150

木橋断面検討図



木橋B案		
規 格	全長	6600
	幅	1700
	通路幅(有効幅員)	1170
	勾欄高さ	710
	半径	10.0m
	端部勾配	34.7%
部 材	①橋脚(脚)	2本×2箇所(檜150φ)
	②貫	檜45×150
	③梁	檜180□
	④根がらみ	檜150×150×2本×2
	⑤橋桁	3本(檜180×210×3本)
	⑥橋桁基礎	土台240×240、240×320 平板直置き
	⑦床板	檜210×t60
	⑧架木(ほこぎ)	檜φ67
	⑨平桁(ひらげた)	檜130×70
	⑩地覆	檜130×120
	⑪親柱	2本×2箇所(檜φ210) H1100
	⑫中柱	無
	⑬擬宝珠	2本×2箇所
	⑭斗束(ますづか)	3本×2箇所 (上部:105×105、下部:120×105)
	⑮たたら束	4本×2箇所(檜120×105)

